始

4ラ103
903

小説

おそかげ

篠原嶺葉著

大正
4. 7. 7
内交

優少年

晴れ渡つた土曜日の午後二時頃であつた。繪から脱け出したやうな美しい姉妹の令嬢が一人の女中を供に連れて、虎の門の電車停留場へ足を留めた。姉は十七八、妹は十二三で扮装といひ、態度といひ、上流の家庭に育つた人といふことは、一目見て誰にも首肯されるのである。

「まあ可愛相ぢやないかね、あんな愛らしい小兒の新聞賣を、どうして苛めるんでせう。」

姉が眉を顰めた。成程見れば、路傍の軒下で、十二三の新聞賣が、十七八二十歳にも成らうといふ、三人の同じ新聞賣に取卷かれて、打たれたり蹴られたりしてゐるのである。小兒の新聞賣は、泣きながら頻りに詫びてゐるのであるが、三人は容易に許す氣色がないのみならず、益々暴力を揮つて打擲してをる。

「早く誰か來て救けて遣ると宜いわね、何して那麽酷い目に遭つてるんでせう。」

妹も同情に堪へぬやういつた。

「交番の巡査さんは、何方へ往らしたか知ら……」と姉が四邊を見廻した。

すると妹が欣々と、

「お姉様、彼處へ佐分様が入來しつてよ、早く願つて救けてお遣りなさいよ、あれあれあんなに酷い目に遭つてますわ。」

「丁度好い所へ入來したわね、お願ひして救けて遣りませうね。」

姉も同意して、今し霞ケ關の方から、此方へ遣つて來たフロック扮裝の青年紳士

に向つて、

「佐分様、誠に相濟みませんけれど新聞賣の小兒が那麽に酷い目に遭つてゐますから、どうか救けて遣つて下さいませんか。」

と頼むだ。佐分と呼ばれた男は、帽を脱して一禮した後、直に駈け着けて、三人の新聞賣を制すると共に少年を救ひ出した。そうしてことの成行を質してをつたが、事の非が三人にあることが明瞭したから、嚴しく將來を訓戒して、やがて少年を連れて令嬢等の傍へ來た。姉は欣ばしさうに微笑みつゝ、

「とんだことをお願ひ申して、相濟みませんでしたわね、仔細は分らないんですけれど、這麽小兒を三人掛で、餘り手荒なことをしてゐるものですから、何とかして救けて遣りたいと存じましても、女ばかりでどうすることも協はないでせう、だものですから、貴方の入來しつたを幸ひに、我を忘れてお願ひ申しましたわ、どうか惡からず思し召し下さいまし。」

佐分は微笑を湛えて、

「決して那樣御遠慮には及びませんが、しかし亂暴の奴等ではありませんか、この小兒が新聞賣に成つてから、世人の同情がこの小兒にのみ集つて、自分等の新聞が賣れなく成つたといふので、この小兒が此處に出ないやうに爲やうと、かゝる亂暴を加へてゐたのです、謂はゞ渠等の勢力爭ひなんですが、氣の毒なのはこの小兒です、足にも手にも血が滲むほどの傷を受けて、鼻からも口からも血を出して居るのです。」

と告げた。少年は欷歔しながら涙の目を擦つてゐた。

「まあ左樣ですか、それでは幸ひ此處にお醫者樣がありますから、願つて診て貰つて遣りませうかね。」

と姉が少年を眺めながらいつた。

「醫士に見せるほどの負傷ではなさ相ですから、宅へ歸して賣藥でも塗らした方が

宜いでせう。」

答へつゝ更に少年に向つて、

「どうだ傷が疼かむ、太く疼むやうならお醫者樣に治療を願つて遣るが。」

「いゝえ、痛くはありません。」

と泣きながら答へた。

妹の令孃は、少年の樣子を熟々眺めてをつたが、左の手の甲から、血が滲み出てをるのを見て、

「血が出てるから、これでお拭き！」

と袂の中から白いハンケチを出して與へた。床しい香料の匂が四邊に浮動した。

「どうも有難う。」

少年は受取つて、直に其ハンケチで手の傷を押へた。佐分は少年に向つて、

「それでは、早く家へ歸つて、能く傷を洗つて、膏藥でも貼つて貰ひな。」

と諭すやうにいつた。

「どうも有難うございました。」

と頭を低げた。

「だがね、お前もう此處で新聞賣ることは舍した方が宜いよ、お前の新聞が能く賣れて、他の者の新聞が賣れないものだから、それが遺恨となつて今のやうな目に遭ふのだから、此處にゐると、まだ〳〵どんな酷い目に遭ふか知れないよ。」

といひ聞かした。

「この間の晩にも、大く打たれたんですけれど、阿母さんが病氣で寢むでるものですから、遠くへ賣りに出ることが出來なくて、それで此處へ出てるんです。」

「阿母さんが病氣だつて、遠くへ出られないことはないぢやないか、どうして出られないのだ。」

「阿母さんと僕と二人限で、外に誰もゐないんですから、時々家へ歸つて、藥を飲ましたり介抱爲たり、何も彼も僕一人で爲なきやならないんですから、それで遠方へ往かれないんです。」

と事情を述べた。

「するとお前の家はこの近くなのかい。」

「琴平町七番地です。」

すると姉の令嬢が、

「お前さんの名は何といふの？」

「僕は高木優といひます。」

「では先日親孝行のために、御褒美を頂いたことはなくつて。」

「は、府知事さんから頂戴致ました。」

「ではお前の事か、この間新聞に出てゐた孝行親聞賣といふのは……」

と佐分が意外に感じたらしくいつた。いつしか通行人が、一人立ち二人立ち、十數

人立留つて、眼を皿のやうに睜つて、負傷してをる新聞賣を中心に、二人の令嬢と佐分とを、物稀らしさうに眺めるのであつた。佐分は衣兜の中から一圓紙幣一枚を取出して、

「これで新聞を買つて遣るから、早く歸つて傷藥を買つて着けるが宜い。」

と與へた。

「新聞は皆な破られて了ひました。」

「だから其破られた新聞の代を、私が遣るから、歸つて往けといふのだ、解つたかい。」

「はい解りました、どうも有難うございます、救けて頂いた上に、お金子を頂いては相濟みませんけれど、新聞を買入れるお金子がありませんから、遠慮せずに頂いて置きます、どうか僕が大きく成るまで貸して置て下さい、屹度お返し致します。」

「何有新聞を買つて遣るのだから、返さなくつても宜いよ。」

「では切望新聞を持つて來ますからお持ちなすつて下さい。」

「破れた新聞を持つて歸つても致方がないから、お前が持歸つて、屑屋にでも遣るが宜い。」

「ではどうか一枚なりと持つて歸つて下さい、それでなければ、阿母さんに叱られますから……」

「何故叱られるんだ。」

「故なくお金子を貰ふのは乞食と同樣だから、決して他樣にお金子や物を頂いてはならないと、堅く言附けられてゐるのです。」

「然うか、諾矣々々、それでは一枚でも二枚でも貰つて置かう。」

と佐分は端の破れた新聞を二三種少年から受取つた。

「では、このお金子は僕が大きく成るまで、どうか拜借さして下さい。」

「諾矣々々解つたよ。」

佐分は微笑みつゝいつた。

「相濟みませんけれど、貴方の御姓名を聞かして下さいませんか。」

「僕の名か、僕は佐分誠也といふ者だ。」

「左樣ですか、どうも有難う。」

すると姉の令嬢も一圓紙幣一枚を出して、

「それでは私もこれで新聞を賣つて貰うわ、破れてゐても宜いから、二枚でも三枚でも頂戴な。」

と少年に渡した。少年はいはるゝ儘に二三枚の破新聞を渡して、

「こんなに頂いては濟みませんからどうかお小錢がありましたら、お小錢ので頂かして下さいませんか。」

いふを打消して、

「小錢のが無いから宜いことよ、それだけお前さんに預けて置て、これから時々新

聞を貰うわ。」

「然うですか、それでは遠慮せずに頂戴して置きます。」

「又苛責られると不可いから、早く歸つて、傷に藥をお貼けなね。」

「有難う、それでは失敬致ます。」

と少年は、令嬢と佐分とに叩頭をして立去るのであつた。姉の令嬢は佐分に向ひ、

「とんだことをお願ひ申して相濟みませんでしたね、唯今御退省ですか。」

「はい、條約改正のために、非常に多忙だものですから、土曜日でも終日事務を執ることが多いのですが今日は特別に早く歸つて參りました。」

「左樣ですか、皆樣大層御精勵でゐらつしやるさうですね、近來少しもお越しなさらないものですから母がお噂申してゐましたわ、日曜にでも御遊びに入來しやいましし。」

「先月以來御無沙汰してをりますから、來週の日曜にでも御伺ひ致します、切望奥

樣へ宜しくお願ひ致します。」

「は有難う、是非入來しやいましね。」

「官省へ出ない限は、必ずお伺ひ致します。」

「では失禮を……」

「失敬致しました。」

と、姉妹の令嬢とお供の女中とは霞ケ關の方向へ、佐分は赤坂見附行の電車へ乘つて立去つた。少年の新聞賣を苛めた、三人の新聞賣は、險惡な眼附をして、佐分の姿を見送つてゐた。集つてゐた見物人は、いひ合したやうに、四散して了つたが、近所の人らしいのが三四人殘つて、令嬢の後を見送つてゐたが、其中の一人が、

「評判のお嬢さんだけあつて、美しいものだね、何時外務省で大夜會の在つた時、外國人と一緒に舞踏をやつて、外國人が舌を卷いて驚いたといふ新聞が出てゐたがまだ十八九だけれども、外國語だつて、二三ヶ國の辭が話せて、加之に女一通りの

ことは、何でも出來るといふのだから大したものぢやないかね。」

感嘆したやうにいつた。

「一體彼は何方のお嬢さんだい、時々此處をお通りなさるのを見受けるが……」

と一人が問ねた。

「あれはお前さん、外務大臣の伊藤子爵のお嬢樣ですよ。」

「然うですか、道理で能く見受けると思ひましたよ。」

寔に姉妹の令嬢は、外務大臣子爵伊藤嘉德の娘で、姉を由緣と呼び年齡は十九、妹を露香と呼び年齡は十二である。又佐分と呼ばれた紳士は名を誠也と呼び、外務書記官中での俊才である。

母子の者が、生命の綱と賴む新聞紙を、引破られた上に、滅茶々々に蹂躙られて剩へ打たれ蹴られて、數ケ所に打撲傷さへ負はされた優少年は、意外の人に救けられたのみならず、過分の金子すら惠まれたから、負傷の痛みさへ忘れて我家へ歸

つた。

優少年の家は、琴平亭といふ寄席の横を入つて左に曲つた、三軒長家の入口の家で、四畳半と二畳の二室限の、人の住居だと思へば、可笑い程の家であるが、しかし彼等母子の今日の境遇としては、僅か二圓五十錢の家賃を拂ふのが苦しい爲に、これすら分に過た住居だと考へてをる、明治の初年頃にでも建築したものであらう軒は傾いてをる、壁土は缺落してをる、屋内は漆で塗つたやうに、眞黑に煤ぼけてをる、地上に板を列べたかと思はれるまで低い床の上に、所々紙で張つた、茶褐色の破畳が敷かれて、入口を入ると二畳の室に、破れかゝつた棍爐に、土燒の釜が掛けてある、其傍には土瓶や炭箱や、食器や、藥瓶や、乃至は粗庖刀などが、算を亂して列べてある。入口の格子を密と開けて入つた優少年は、

「阿母さん、藥を買つて來たが、直に服まないの！」

と奥の四畳半に寢てをる、病氣の母に辭をかけた。

「それは能く買つて來てお下れだね、では直に頂くから、持つて來てお下れ、例の水藥でせうね。」

と滿足さうに答へたのは、優の養母お政で、年齡は四十五である。事の順序としてお政と優少年との關係を記さうなら、このお政といふ女には、長兵衛といふ夫があつて、炭薪の小賣渡世をして、豐といふではなかつたが、それでも其日々々に不自由もなく、太郎といふ小兒さへ擧けて、家業大事に、睦じく暮してをつたが、太郎が六歳の時に、夕方外面で遊んでゐたまゝ、行衞が知れなくなつたので、夫婦は殆んど氣も狂はしく、警察署へ搜索方を願ひ出るやら、家業を休むで尋ね廻るやら、一週間ばかりといふもの、夢中になつて搜して見たが、どう搜して見ても所在が知れない爲に、精も魂も盡き果てゝ、諦められない愛惜を、少に制へて、歸り來る日を今日か明日かと待受けてをつたが、待効もなく、早くも一ケ年は夢と過たけれども、太郎の所在は無論、生死の便すら知れなかつた。

彼是して暮す中に、三年の星霜を送つたが、太郎の消息も分らなければ、小兒も出來ないので、太郎のことを思ひ出しては語り合ひ、語り合つては涙を零すが例であつたが、某時曾て出産を助けて貰つた、岩田竹子といふ産婆に出會つて、太郎の行衛の知れなくなつた物語をした所が、それでは幸ひ二三ケ月以前に生れた、愛らしい男の兒があるから、それを貰つて、育てる氣はないかと勸められて、夫長兵衛と相談の結果遂に竹子の世話で貰ひ受けたのが、優少年であるのだ。

しかるに其後今日に至るも、太郎の生死は知れないが、養子の優は、蟲の氣もなく、すら〳〵と成長して早くも十歳の春を迎へた。年齢相當よりは脊も高く、色も白く、軀に品位が備つて、容貌の秀麗なことは、譬へるに物がないほどの美少年である、ために近所では、烏が孔雀の兒を育てゝゐると、惡口をいふ者さへあつた、長兵衛夫婦は、太郎の代に神樣から授けられたのであらうと、二なく愛してゐたが不幸は再び高木の家を呪ふて、其頃神田神保町に棲むでゐた長兵衛は、近火の爲に

全燒となつたのみならず、其身も火中に葬られて了つた、お政と優とは漸く一命のみは救かつたが、肝心の主人に亡くなられた爲に、泣く〳〵送葬を營むで、今から四年以前、目今の長家へ引越して來たのであるが、不幸は執念くも三度襲ふて來た。

お政母子は、同情者の助力に依つて、目今の長家へ移轉するには爲たものゝ、水から揚げられた魚と同樣何を營むで其日を送らうといふ方針が立たないので、三日三晩も思案した末に、手續を求めて、慈惠病院と東京病院との兩院へ、太福餅や狐鮓飯などを作つて、賣に往く身の上となつた。

しかるにこのお政といふ女は、今でこそかくまで零落してをるけれども、素性正しい士族の家に生れたので、何處ぶに其血が潜むでゐたと見えて、一度かうと思ひ定めた上は、飽くまで其を爲果せるといふ、男優りの氣慨をもつてゐるので、慣れない商賣ながら、雨の日も風の日も、二つの病院を華客場所として勉强した爲に、二三ケ月後には、左にも右にも、母子二人が糊口に差支へぬまでになつたから、其

翌月からは、優を西櫻小學校へ入學させて、其成長をのみ樂しみにしてゐた。ところが昨年の冬、風邪に冒されながら、療養せずに、働いたのが原因となつて僂麻質斯に罹つたが、それをも推して家業を勵むだ結果、この春の晩から、遂に手足の自由が利かなくなつて、床に就いて了つた、優はそれがために學校を退學して、お政の看護をするのみでなく、お政の指圖を受けて、餡餅や鮓飯などを作くつて、母の代に病院へ賣に往つてゐたが、お政の病氣が治らないばかりでなく近頃に至つては腎臓病さへ併發して、到底全治の見込が無いといふ、醫師の宣告を受けたので、失望爲ながらも、如何にもして全快させたいと、朝未明に起きて、金刀比羅神社へ、病氣全快の祈願に參詣する、僅か十三の少年でありながら何から何まで一身に引受けて、母の看護に誠意を盡すところから、いつしか此事が府知事へ聞えて、調査の結果、其孝心を表賞して、金圓を下賜されたけれども何しろ十三の少年であるからお政の發病以來、漸次病院の方も買つて下れる人が少くなつて、到底一家を支持し

て往くことが出來なくなつた爲に、他の勸めるまゝ、新聞賣に商賣替をしたのである。しかるに、誰いふとなく孝行者の新聞賣といふ噂が立つたので、優に母子が生活するに足るだけの利益が得られる境遇となつた。

以上が優少年とお政との關係である。

優少年は、お政の枕頭に買求めて歸つた、水藥を持つて往つて、

「散藥の方はお服みなすつたでせうね。」

問ねつゝ、水藥を猪口に注いで進めた、お政は永々の病症に、肉は落ち骨は細つて、如何にも苦痛の痕が見えるが、それにも拘らず言葉のみは元氣宜く、

「散藥は一服殘つてゐたのを、先刻飲んで了つたよ。」

いひつゝ、痩せ細つた青白い手を出して、水藥を一氣に服むで了つて、而うして苦しさうな息を微に洩らしつゝ、

「今日は歸りが大層早いやうだが、新聞は賣れたのかい。」

病氣ながらも、其日々々の生活が案じられるものか、恁う問ねた、優は忽ち其挨拶に當惑した、孝心が深いだけに、事實を語れば、母が心配して病氣に障るであらうし、然うかといつて、僞をいふのは尙孝道に缺ける理だし、如何に答へたものであらうかと、躊躇した、其樣子を早くも見て取つたお政は、心配さうに優の顏を熟と眺めてをつたが、忽ち唇元の腫上つてゐるのを認めた。

「おや、お前唇元を何うしたの、大層腫上つて血が滲むでるぢやないか。」

優はハツと周章て、掌をもつて傷を押へた。

同時に顏を染めながら、

「……堪忍して頂戴な……えゝッ。」

と涙含むで詫びた。

「一體何うしたのだい。」

お政も有繋不安さうに問ひかけた。

「……打たれたんです。」

優は聲曇らして恁う答へた。お政は瀕死の病氣も忘れたやう、

「えゝつ打たれたつて！、誰、誰に打たれた、何……何をして？」

と急き込むで問ねた。優は遂に涙ながら、三人の同業者に、迫害されて、持てゐた新聞紙を破られた上に地上へ押倒されて、打たれ蹴られてゐる所を、通りかゝつた佐分といふ人に救はれた事から、佐分と知合らしい令孃とが、同情の餘り破れた新聞紙を買取つて呉れた顚末を、僞りなく物語つた、聞了つたお政は齒噛をしつゝ、

「だけれども、理由なく那樣目に遭はせるといふ方はないから、お前が何か不調法したのぢやないか。」

「否え、僕何にも爲ないんですが、新聞を買ふ人が、僕の新聞ばかり買つて呉れるものだから、それを怨にもつて、僕が出なくなるやうに爲る意で苛めるんです。」

「那樣亂暴な事があるものかね、彼處には交番が在るのに、お巡査さんはゐなかつ

たのかい。」

口惜しさうにいつた。

「これまでは、何時もお巡査さんが立つてるものだから、口頭では隨分酷い事いつてたけども、亂暴は爲なかつたんですが、今日は生憎お巡査さんが、何處かへ往つてゐなかつたものだから、それで酷い目に遭はされたんです。」

「それで其三人は何う爲たの、何處かへ往つて了つたのかい。」

「いゝえ、彌張彼處で賣つてます。」

「まあ、呆れ返つた奴等だね、圖迂々々しい、何故お巡査さんに訴へて遣らないのだ。」

「だつて、訴へでもすると、暗の夜に殺して了ふといふのですもの……」

「何て怖ろしい奴等だらう、暗の夜に殺して了うつて？　晝日中に那樣亂暴するほどの奴等では、眞箇暗の夜には、どんな事をするか分つたものぢやないね、私が這

麼體でなければ、此儘赦す奴等ではないけれども、何事も浮世ぢやと思つて、胸を押へて我慢する外はない、お前も殘念だらうけれど、韓信といふ人が、辱を忍んで賤しい者の跨を潛つた例もあるんだから我慢するが宜い、那樣奴等は自然と酬が來て、誰かに酷い目に遭ふからね。」

「僕傷は痛くても我慢するけども、明日から新聞賣に出る場所に困つてるんです、電車の交叉點で無いと、迚も二百枚の新聞は賣れないんですからね。」

「何處か外に好い場所は無いかね……」

「在るには何程も在りますけれど、何處へ往つても古くから賣つてる人があつて、自分の持場所と極てるんですから、妄に往かうものなら、又今日のやうな酷い目に遭はされるから、出るなら出るやうに渡を附けた上でないと困るんです、それに僕のは時々家へ歸らなきやならないんですから、餘り遠い場所では困りますしね。」

「まあ、新聞賣に出るのでも、那樣小難しい氣兼苦勞が在るのかね。」

「虎の門へ出る時、元から出てゐた人達に、渡さへ附けて置けば、順しく賣らして呉れるんですけれど、一人に一圓宛三圓出せといふのだから、僕斷つて了つたんです。」

「三圓出せつて！　そりや母子が其日々々を送る命の綱だから、出せる身分なら三圓は五圓でも出すけれど……三圓は措て三十錢だつて、今日の身分では出せないのだからね。」

と屈托したやうにいつた。

「外を當つて見て、出る場所が無いやうなら、どうせ憎まれ序に、矢張虎の門へ出ますよ、生命には替えられませんからね。」

「だけれども、又亂暴されて、太い傷でも負はされると、始末に了へないからね。」

「まあ能く考へて見ませう。」

子爵邸

外務大臣伊藤子爵邸の一室で、嬉々として四方八方の物語に興じてをるは、今日の日曜に訪るべく約束した、外務書記官兼外務秘書官佐分誠也が來た爲に、外相夫人咲子を始め由緣、露香の二令孃が、打集ふて欵待してをるのである。

誠也は外交官試驗に登第すると共に、在英國の日本大使館在勤を命ぜられて、倫敦へ赴任したが、時の英國大使は、現今の外相伊藤子爵で、其信任を得た結果、子爵が外相に榮轉すると同時に、外務省へ招還されて、外務書記官兼外相秘書官に任命されたのである、帝大政治科卒業の俊才で、年齢は三十三である、容貌の端麗な、風采の堂々とした、交際に長けた青年紳士で、外相は無論であるが、夫人からも令孃からも、非常に敬愛されて、子爵邸に何事があつても、佐分の招かれないことは殆んど稀な位である。

露香は露を含むだやうな、愛らしい瞳を張つて、佐分の顔を瞻仰げながら、

「佐分さん、私に舞踏を敎へて頂戴よ、來年の夜會には、私も踊りたいわ。」

と無邪氣な事をいふ。佐分は笑ながら、

「舞踏ならば、私よりかお姉樣の方がどんなにお上手か知れませんから、お姉樣にお學びなさいませ。」

「嘘よ、お姉樣より貴方の方がお上手だわ、夜會の時、お姉樣と貴方と踊つてゐらつしやるのを見て、貴方の方がお上手だつて、皆樣が賞めてゐらしつてよ。」

「そりや貴女のお聽違ひです、私を賞めたのぢやありません、お姉樣を賞めたのです。」

「いゝえ、さうぢやないことよ、貴方を賞めてゐたのだわ、有繋外務の花方だけあつて、日本人にあれだけ踊れる人は外にはないつて！」

「誰が那樣事をいひましたか知ら、とんだ事を聞かれましたね、はゝゝ。」

「貴方眞箇お上手だわ、私御一緒に踊るには踊つたけれど、冷汗が流れたわ、一生懸命に成つても、貴方のやうに足運が輕く踊れないんだもの……」

と姉の由緣が賞めた。

「貴女にまでさう申されては恐縮爲ますね。」

すると咲子夫人が、

「眞箇日本人の舞踏中では、宮樣方は別として、貴方方のが一等評判でしたわ。」

「さうでしたか知ら、久しく踊らなかつたものですから、物に成つてゐなかつたやうに存じましたがね……」

「それにまだかういつてたのよ、舞踏も上手だが、男振も一等だから大臣の令孃とは好一對だつて、好一對とは佐分さん何のこと！」

露香が問ひかけた。佐分は當惑さうに夫人の方を見た。由緣も思はず顏を染めた

夫人は微笑みつゝ、

「好一對といふのは、何方も能く揃つたといふことよ。」
「では何が揃つたといふことなの。」
と遠慮なく追窮する。
「露さんは爲やうがないね、那樣事ばかり問ねて、舞踏が能く揃つたといふことよ。」
「さう……」
まだ得心は行かぬやうであつたが、その儘口を噤むだ。
「今日は閣下は何方へか御出かけなすつたですか。」
と佐分が問ねた。
「私の實家へ往かれましたが、正午までには歸るといつて出られましたから、今日は終日遊んでゐらつしやいよ、久し振に何か御馳走爲ますよ。」
と夫人が答へた。ところへ小間使が來て、

「國弘さんがお越なさいまして、奥樣かお孃樣にお目に懸りたいと仰やいますが、如何致しませう。」
夫人は由緣と顏を見合せて、忽ち眉を顰めた。
「國弘さんかい、困つたね……私が會ふと都合が好くないから、由緣さん、お前さん會つてお下れよ。」
「私！　尙更困るわ、彌張母樣が宜いわ。」
「では私がお目に懸るから、左に右洋館の應接室へお通し申して、唯今お目に懸りますと然う申して置きなさい。」
「畏りましてございます。」
小間使は去つて了つた。
「國弘さん、日曜だと何時でも入來しやるのね。」
と露香がいつた。

「本當だよ、近頃は日曜毎に必ず來るのね、格別の用事もないのに、御來客の節なぞ、眞箇困つて了ふわ。」

迷惑さうにいつて、更に和かに、

「佐分さん、貴方由緣と話してゐて下さいね、親戚の者が來ましたから、私暫時失禮致ますからね。」

「御邪魔してゐますから、どうか御遠慮なく……」

咲子夫人は、國弘に會ふべく、會釋して室を出た。因にいふ國弘といふは、名を鹿造といつて、體の岩丈な、肉附の宜い、色の淺黑い男で、年齢は三十一である、伊藤外相の兄の小供であるから、即ち外相には甥、由緣や露香には從兄に當るのである。陸軍幼年學校出の步兵大尉で、第一師團の一聯隊に勤務してをる。

咲子夫人は應接室へ入るが否や、有繫に外交官夫人だけに、溫かい笑顏を見せて、

「お待たせ致ましたわね、今日は叔父樣が不在なのに、丁度御來客が在るものですから、私と由緣とでお相手してゐたものですからね……」

いひつゝ座に着いた。國弘は頻りに卷莨を喫してをつたが、忽ち吸殼を火鉢の灰へ突差して、

「それは御多忙中を御邪魔致ますね、實は叔父樣に御目に懸る意で上つたですが、御不在だといふことですから、それで貴女へと申上げたんです。」

「左樣でしたか叔父樣には相良首相から、是非相談があるからといふ電話がかゝつたものですから、九時頃御出かけなすつて、まだ御歸りなさらないんですよ、事に依ると私の實家へ寄るやうにいつてをられましたから、何時歸られるか知れないんですよ。」

「何有、叔父樣が御不在なら、强て叔父樣でなくちやならないといふ理ではないですから、貴女にお話すれば、それで澤山なんです。」

「何ういふお話が知らないけれども、私で分るお話なら、何なりと仰やつて下さい私一人で斗ひかねるお話なら、叔父様が歸られた上で、相談して御挨拶致ますからね。」

かゝる折しも、小間使が茶菓を進めて去つた、國弘は後見送つた後、

「別段のお話ではないですが、結婚のことに就いてです、といふのは、一昨日のことでしたが、聯隊長殿が私宅へ寄つて下れいといふことでしたから、隊からの歸りに寄つて見ますと、種々御馳走した上で、お嬢さんを私に貰つて下れないかといひ出されたのです。けれども私には既に由緣さんとの內約があることですから、いづれ叔父と相談して御挨拶致しますと、漸と其場は切拔けて歸りましたが、相談といふのは其事に就いてです。」

「それは結構なお話ではありませんか、由緣と貴方とは從兄妹同志で法律上こそ結婚を許してゐますけれど、謂はば血族結婚ですから、成るべくなら望ましくないで

すからね……それに叔父様が醉つていはれたことで、まだそれと婚約を極めた理でもないんですから、由緣に關はずお貰ひなすつた方が宜いぢやありませんか。」

國弘の精神では、他から緣談がある旨を語れば、由緣との緣談を急ぐであらうと思ふたのであるが、豫想は意外に齟齬して、何うやら婚約を否定される口吻が見えるので、慌ただしく、

「叔母様、誤解して下すつては困るです。私が上つたのは、他から緣談が在るからそれが貰ひたいといふので、御相談に上つたのではないです、唯今もお話する如く上長官から直接の相談ですから斷るに斷り惡いのですが、實をいへば、何より彼より、直にも斷りたい理由が在るのです、それは外ぢやないです、肝心の當人が私の氣に入らないです……ですから私から斷ると、上長官と部下といふ關係がありますから、惡感を起されでもすると、一身上非常な不利益がありますから、由緣さんとの關係を楯に、叔父様から體裁好くお斷りして貰ひたいと思つて、其御相談

に上つたので、決して貰ひたいからといつて、御相談に上つた理ではないんです。」と諄々と辯解した。

「ですけれどもね鹿造さん、其事は叔父樣が歸つたら御取次は致ますけれど、由緣との緣談は叔父樣が酒興に乘じて仰しやつたことで、謂はゞお座興だつたのですから、必ず當にしないで下さいよ、設令叔父樣が眞實その精神で仰しやつたとしても當節は親の意見のみで取極める理に行かないことになつてるのですから、肝心の當人が何といふかも知れないですからね。」

否むがやうにいつて、瞥乎と國弘の顏を見た。國弘は不快氣な顏色をして、

「それは叔母樣酷ですよ、それならば早く然ういつて下さるが宜いぢやありませんか、あの話が在つてから、既に半ケ年經つぢやないですか、其間殆んど日曜毎に來てゐるのに、あれきり何の御話もありませんから、私は其決心で、內々準備を急いでゐたのです。それは貴女の仰しやる通り、昔と違つて現今は當事者本位ではありますけれども、由緣さんが今更故障をいふ筈はないぢやありませんか。」

と自信あるらしくいひ放つた。咲子夫人は意外に感じたやう、

「それは又どういふ理由でございます。」

と眼を睜つて問ひかけた。

「別に理由はないですが、叔父樣がこの緣談をなすつた節、由緣さんも傍にゐて、確に聽いてゐたのですが、異議をいはなかつたのみならず、內心欣んでゐたことは其際の顏色でも分つてゐます。それを今更となつて左や右仰やるのは、屹度他に良緣が見附かつたので、私の方を破談なさるお心なんでせう、それならばそれと、判然と仰やつて下さい、私にも決心がありますからね。」

立腹がましくいつた。夫人は當惑顏して、

「まあ、貴方は勘違してゐらつしやるわ、私が唯今申上げたことは、他から良緣があるために、貴方の方を斷るの斷らないのとそんな意味でいつたのではありません

わ、あの後叔父様へ眞面目に問ねて見ましたら、由緣は軍人嫌ぢやから、嫌がらす爲にいつたまでのことだと、眞箇の座興のやうにいつてゐましたから、それで申し上げたまでのことで、貴方の方を斷つて、他へ遣るといふ、そんな量見でいつたのではないですよ、どうか誤解なさらないで下さい。」

と事の眞相を打明けて、慰めるやうにいつた。國弘は益々怒氣を浮べて、

「それは異なことを承はるものですね、すると叔父は私を愚弄したのですね、いゝえ苟めにも軍服を纏ふた、帝國軍人を翻弄したのです。十や十一の小兒ならばいざ知らず、いくら叔父甥とはいひながら、笑談も翻弄も事に依りけりです。」

國弘は尙も語氣荒々しく、

「笑談なら笑談で管はないから、笑談でいつたのだと、得心させるが宜いぢやありませんか。叔父は笑談でいつたのか知らないですが、私は決して笑談とは思はなかつたです。ですから、心中窃に良緣を欣んで、知己友人にも誇顏に吹聽して了つた

です。それであるのに今日となつて、座興だとか、笑談だとかいつて、有耶無耶に葬られては、第一知己友人へ對して、會はすべき面目がないです、かういふことを承はつた上は、此儘歸る理には行きませんから、叔父様の歸られるまで御待受して、總ての解決を着けて歸りませう。」

と決心を洩らした。

「お待になるのは、少しも厭ひませんけれど、何時歸つて入來しやるか知れませんから、それでは電話をかけさせて、歸宅時刻を聞かせることに致しませう。」

といふを遮るやうに、

「何有時刻なぞ管はないです、どうせ今日は日曜のことですからね、豈夫外泊される氣遣はないでせうから……」

「ですけれど、お待なさるとすれば成たけ早く歸つて入來しやるやうに、さう申させますわ。」

と呼鈴を鳴らして召使を呼んだ。音に應じて小間使が入つて來た。夫人は主人の出先へ電話をかけて、歸邸時刻を問ねさせ、若遲くなるとの辭であれば、成たけ早く歸邸されることを、傳へよと命じた、小間使は畏みて室を去つたが、やがて再び入つて來た。

「もう先刻お歸り遊ばしましたさうにございます。」

と告げた。

「へえ……お歸りなすつた！　それでは倶樂部へでもお寄りなすつたのではないか知ら……一度霞倶樂部へ問合して御覽！」

「はい。」

と小間使が去らうとした時、彼方の玄關頭で、

「お歸り……」

と勇ましい聲が聞えた。

「お歸り遊ばしましてございます。」

と去りかけた小間使が知らせた。夫人は國弘へ會釋した。

「暫時失禮致します。」

といひ棄てゝ、あたふた玄關へ駈け出した。そうして今や馬車から降りて、悠々と内へ入る主人を迎へた。主人の子爵は其儘巳が書齋へ入つた夫人も續いて入つた。

「不在中に誰か來はしなかつたか。」

「英國大使館の新任武官だといつて、若い軍人が挨拶に來られた外、佐分さんが遊びに來て、まだ遊んでゐますし、國弘さんが貴方に會つて解決しなければならないことがあるつて、待つてゐられるのですから、唯今石崎へ電話をかけさせたところでございます。」

「私に會つて解決しなければならないことがあるつて！」

「は、それは他のことではないんですけれど、日外貴方が、晩餐の席上で、國弘さ

んと由縁とを結婚さすと仰やいましたのを、眞實に受けられたと見えて、近頃は來る度毎に由縁を捉へて、結婚に就いての話をして見たり、私に對して、謎をかけて見たりしてゐられましたが、聯隊長とかゞ娘を貰つて下れいといふから、由縁との縁談を決定して欲しいと、眞面目に話し出されたものですから、あの話しは座興に仰やつたので、眞實ではないと、辯解しましたけれど、友人に吹聽したから、今更そんなことをいはれては困るから、貴方に會つて解決するのだと仰やつて、ぷりぷり怒つて待つてゐらつしやるんです。」

伊藤子爵は悠々と葉巻を喫して、

「莫迦な奴だね、それでまだゐるのか。」

「は、應接室で待つてゐらつしやるんですよ。」

「それでは會つて遣るから、此處へ呼ばして下れ……」

「ですけれども貴方、會つて何んと仰やるお考へなんです。」

不安さうに問ねた。

「鹿造の意見を聽いて見なければ、何といふか分らないね。」

「鹿造さんは、何でも彼でも由縁と結婚すると、さう仰やるに極つてゐますけれど由縁は鹿造さんとは、決して結婚致ないといつてゐますから、婚約することだけはお舍しなすつた方が宜うございますよ。」

と注意した。

「由縁が嫌だといへば、鹿造が何といつても致方無いぢやないか。」

「ですから、其お心算でお話なさらないと、後でお困りなさることが出來致しますよ。」

「諾矣々々、解つたから、直に此處へ呼んで下れ……」

「宜しうございます、直に呼ばせます。」

と咲子夫人は、子爵の室を立去つた。が間もあらず、國弘が軍服の肩怒らして入つ

て來た。

「御不在中に上つて失敬してゐました。」

と打解けた挨拶して座に着いた。

「何か用向があつて來たさうだが、どんな話だ。」

と輕く問ひかけた。

「他の用向では無いんですが、叔母樣へ些とお話して置ましたが、結婚のことに就いてゝす。」

と咲子夫人へ物語つたと同樣な話をした後やゝ口籠りつゝ、

「さういふ次第ですけれど、私の口から其緣談を拒絕する日に成りますと、上官と部下との關係上、何彼に就いて不利益がありますから、私の口から直接には斷りかねるのです、就きましては、幸ひ由緣さんと結婚する內約も出來てゐることですから、叔父樣から體裁好くお斷りして頂きたいと、それが爲に上つたのです。」

と物語つた。子爵は葉莨を喫しつゝ、靜に聞いてをつたが、

「しかし、それは拒絕致ないで、貰つて方がお前の將來に就いて、非常な利益があるやうに思はれるから、早計に斷らないで、熟考して見た方が宜いだらう。」

國弘の心の底を讀むやうに顏を見た。國弘は忽ち不快さうに、

「仰やるまでもなく、熟考して見たですが、何うしても貰う氣にならないんです、といふのは、年齡も二十四ですし、第一容貌が宜くないですからね、一生の幸福を犧牲にしてまで、貰ふ必要はないと思ふです。」

「氣に入らないものなら、强ひて勸めはしないけれども、私から斷るといふのは變則ぢやないか、私とは何等無交涉な緣談だからね。」

「ところが、それが無交涉でないです、聯隊長殿から其話があつた際に、私の一身は總て叔父が監督することに成つてゐますから、何れ叔父と相談して御挨拶するとさういつてあるのですから、貴方から斷つて貰へば、惡感を起させなくて、斷るこ

とが出來るのです。」

「だが、斷る理由が無ぢやないか。」

「ですから、由緣さんと幼少の頃から許嫁に成つてゐて、今更變更することは、親戚へ對してならないから、至極良緣と考へるけれども、惡からず斷念して下れと、さう仰やつて下されば宜いぢやありませんか。」

「だが、お前由緣々々といふけれども、由緣との緣談を當にしてはならないよ。」

伊藤子爵の辭を聞いた國弘は、

「えゝつ！」

と驚の目を睜つた。子爵は極めて沈着いた態度で、

「由緣との緣談を當にしてはならないといふのだよ、お前は日外私が座興にいつたことを眞に受けてゐるかも知れないが、あれは酒興に乘じて、笑談にいつたのだから、必ず眞實と思つてはならないよ。」

と得心するやうにいひ聞かした。

「叔父樣、それは徒目です、私は笑談や酒興だとは思はないものですから、既に同僚や知己の者共へ、吹聽して了ひましたから、今更笑談にされては、面目無くつて聯隊にゐることが出來ませんから、そんなことを仰つらずにどうか、由緣さんと結婚さして下さい他人でばなし、許して下すつても宜いぢやありませんか。」

「まあ〳〵由緣との結婚は、右に左措いてぢや、聯隊長の方だがね、何うあつても私から謝絕して下れといふなら、謝絕はして遣るが、しかしだ、それを口實にして由緣との結婚を强求してはならないよ、由緣との問題は、聯隊長の方と、全然無關係なんだからね。」

「いゝえ、無關係ぢやありません、聯隊長の方を謝絕するのも、畢竟由緣さんとの婚約が在るからです。」

「それでは、由緣の方を斷念して、聯隊長の方を貰ふが宜いぢやないか。」

「だつて、知巳や友人に吹聽して了つた今日ですもの、男子の面目上軍人の本領として、那樣理由には行かないです。」

「それでは何うするといふのだ。」

「ですから、聯隊長の方を斷つて下すつて、同時に由緣さんとの結婚を許して下されば宜いのです。」

「沒了漢ぢやね、由緣との結婚は酒興に乘じていつたまでのことで、婚約した理ではないぢやないか。」

「それは叔父樣が今日に至つての遁辭といふものです、結婚さす御心がなかつたら由緣さんを眼前に置てあんな辭の出やう筈が無ぢやありませんか、結婚させても宜いといふ、許諾心があればこそ設令酒興にもせよ、平素謹嚴を以て、自ら任じてゐらつしやる、叔父樣の口から仰やつたのでせう……私は笑談でも酒興でも管ひませんが、右に左知巳友人への面目上、今更異議をいはれては困りますから、どうか

改めて御承諾を願ひます。」

と熱心を面に表して訴へた。子爵は當惑の色を泛べながら、

「お前が困るといふことなら、私は遣つても管はないけれども、しかし往昔と異つて、當今では、親の專斷で婚約を取極ることが出來なく成つてゐるから、由緣の意見を聞いて見て、彼女が承知さへすれば、お前の希望に應じることに致やう。」

と辛くも挨拶した。

「それでは失禮ですが、由緣さんをお呼びなすつて、直に意見を聞いて頂きたいものですね。」

「何も然う性急に問ねなくても宜いぢやないか、女といふものは、結婚のことなど問ねられると、親の前でも羞含むものだのに、況して欲しいといふ當事者の面前へ呼び出して問ねて見たところが、其場で挨拶するものぢやありません。」

「それでは、明日までに意見を確めて置いて下さい、午後の七時頃お訪ね致ますか

ら……」

「宜しい、何といふか知れないが、意見を問ねて決定して置くことに致やう。」

「どうかお願ひ致します。」

國弘は、やがて別を告げて歸つた。

由緣と露香の姉妹を對手に、嬉々として物語つてゐた佐分は、談話の絶間を見て、

「閣下は、まだお話中でゐらつしやいませうかね。」

と由緣の顏を見た。

「然うですね、隨分長くなりますから、もう歸られたかも知れませんわ、何か御用がお在りなすつて？」

「いゝえ、別段用向の在る理ではないですが、日外救けて遣りました、あの新聞賣の小兒を、閣下にお願ひして、外務省の給仕に使つて遣つて頂きたいと思ひますので、御閑暇でゐらつしやるなら、御目に懸つてお願ひして遣りたいと思ひまして……

……」

と答へた。

「まあ、それは宜いところへお氣が附きましたわね、あんな孝行な小兒は、なんとかして救けて遣りたうございますわね。」

由緣がいへば、露香も勇み立つて、

「本當に可哀相だわね、父樣に賴むで遣つて頂戴なね佐分さん……」

「私は一昨日、彼の少年に會ひましたから、情況視察といふも誇大ですが、どんな狀態か知らと、好奇にも宅まで同行致ました、しかるにです、宅には殆んど瀕死の病母がゐて目も當てられない慘憺たる狀態ですが、有繋に表賞されるほどの孝行少年だけあつて、病母に對する其看護は、實に手慣た上に行屆いたもので、感服する外なかつたです。けれども十三の少年が僅に新聞を賣つて、其利益を以つて母子二人が生活してゐるのですから、到底人並の生活が出來やう筈はないですから、何と

かして援けて遣りたいと考へました結果、丁度給仕が一人今月限り、辭職する筈に成つてゐますから、其後へ使つて遣つて頂きたいと、それをお願ひ致たいです。」

「然う願つて遣つて下されば、何程かでも助かりますわね、では露さん、お前應接室を伺つて入來しやい、まだ國弘さんがゐらつしやるか何うか……」

と命じた。

「では私見て來てよ。」

露香が室を去つた。夫人は料理の指揮でもしてゐるのであらう、先刻子爵を迎へたまゝ姿も見せない。佐分と由緣と二人のみと成つたので、互に極惡しげに口を噤むだ。が佐分は外交官だけに、直に話の緒を出した。

「國弘さんと仰やるのは、日外些とお目に懸りました、軍人の方でゐらつしやいますか。」

と問ひかけた。

「は、陸軍の大尉です。」

「確か御親戚でゐらつしやるやうに承はつてゐましたが、私の間違ですか知ら……

……」

「は、然うなんです、父の甥に當るのです。」

「大學出でゐらつしやいますか。」

「大學出ならば、前途有望ですけれど、士官學校を出た儘ですから、望ありません わ。」

かゝる話の折柄へ、露香が欣々と入つて來た。

「國弘さん、唯今辛と歸つてよ、隨分長かつたわね。」

と告げた。すると由緣が、

「然う、隨分長かつたわね、お父樣は！」

「お父樣、唯今此處へ入來しやるかも知れないわ、佐分さんは何方にゐるかといつ

て問ねてゐらしつたのよ。」

「露さん、此方にゐらつしやると、然ういつたの？」

「は、例の八疊で、姉様と話してゐらつしやると然ういつたわ。いつたつて宜でせう、不可いこと……」

と由縁の顔を見上げて恁ういつた。

「いつたつて宜いことよ。」

といふ時、脊のすらりと高い、鼻眼鏡をかけた、和服姿の子爵が、和々と笑ひながら入つて來た。

子爵は打解けた態度で座に着いた。佐分はやゝ姿勢を正して、

「御不在中に伺ひまして、お邪魔をしてをります。」

と挨拶した。

「日曜に來るとは稀らしいぢやないか。」

「はい、日曜には餘り伺つたことないのですが、先日お嬢様方とお約束があつたものですから、それで午前中からお邪魔に伺ひました。」

「お父様さうなのよ、ツイ先日姉様と御一緒に、ピアノの先生のお宅へ往つた歸りがけに、虎の門の停留場でお目に懸つたものですから、日曜に是非入來しやいと、私がいつたのよ……ね佐分さん……」

と露香が何かお手柄でもしたやうにいひ出した。子爵は微笑を洩した。

「お前のお相手に招かれては、佐分君も難有迷惑だらう、はゝゝは、其代りお禮に御馳走でも澤山致なければならないよ、母様にさういつてらつしやい、もう時刻が來ましたから、佐分さんに、澤山に御馳走して下さいつて！」

「いはなくつても、母様御馳走すると仰やつて、彼方へ往らしつたんですよ。」

「さうか、それではね成たけお早く願ひますと、さういつてらつしやい。」

「はい。」

と露香が欣々と室を出た。佐分は其姿を微笑して見送りながら、

「實に御活潑でゐらつしやいますね。」

「倫敦に四ケ年もゐたのだから、其感化を受けたと見えて、どうもお轉婆で困るのだ。しかし年頃になれば、一變して柔順になるであらうとは思ふけれど、今日では男の兒と同然だからね、はゝは。」

「無邪氣でゐらつしやるから、一層愛らしくてゐらつしやいます。」

「さうでもありませんわ、時々大人も及ばないやうなことをいひ出すんですもの、無邪氣どころぢやありませんわ。」

と今まで慎しやかに控へてゐた、由緣が打消した。ところへ露香がばた〳〵と入つて來た。

「もう直に差上げますから、暫時お待下さいましつて……」

「さうか、それは御苦勞さま。」

すると露香は佐分を見上げて、

「佐分さん、もう父樣へお話しなすつて！」

と藪から棒に問ねた。佐分は不審顏して、

「何でしたつけね。」

と問返した。

「もう忘れたの……孝行新聞賣のことを……」

「あのことですか、いえまだ申上げませんが、早速お願ひ致しませう。」

子爵は怪訝顏をして、

「孝行新聞賣!?　それがどうかしたといふのか。」

「いえ、別段どうもした理由ではございませんが、實は閣下御覽に成りましたか、どうかは存じませんけれど、先般のことですが、都下の有ゆる新聞紙に、少年の新聞賣が孝行の故をもつて、府知事から表彰された記事が掲つてをりましたが、其少

年が計らずも虎の門の電車停留場で、仲間の青年から迫害されてをるのを、お嬢様方と共に援けて遣つたのでございます。」

といふを子爵は遮つて、

「其話は直に露香から聞いて承知してをるが、その少年がどうかしたといふのかね。」

「御承知でゐらつしやいますなら、尚更好都合でございますが、如何でございませう、閣下附の給仕が今月限りお暇を頂く筈になつてをりますから、其後へ御使用下さる理には行かないでございませうか。」

と訴へた。子爵は不思議相に、

「それはどういふ事情なのだ。」

と仔細を問ひかけた。

「別に深い仔細のある理ではございませんけれど、私が彼の少年に偶然出會ました

ので、宅はと問ねますと、ツイ近所だといひましたから、好奇心に驅られて、少年と一緒に宅へ往つて見たのです、致しますと豚小家よりも酷い家に、瀕死の重患に惱まされてゐる養母が、蒲團といふのは名ばかりで、襤褸切を繼合したやうな、薄ッ片な夜着を纏ふて、苦しさうな聲を出して、病床に寢てをりましたが、私が先日些少の金子を惠むで遣りました、其人であることを、少年が聞かせますと、痩細つた兩手を突いて、落涙しながら禮を述べまして、且つ申しますのには、私はこの重患で、生命が早夕に迫つてをりますから、寧そ一時も早く死んで了つて、病氣の苦惱が遁れたいのですけれど、まだ辛と十三に成つたばかりの、この小兒が氣に懸つて、死ぬにも死ねない心配を致てをるのでございます、それといふのは、眞箇の親一人、子一人で、親戚の者が唯一人ゐないために、自分が亡くなつて了へば、定めて心細く思ふばかりでなく、折角御褒美まで頂戴した、氣立の優しい悴が、甚麼人間に成り果ないとも限らないから、せめて息在る中に、誰方か義俠のある方に願つ

て、蔭ながら惡い道に踏込まないやうに、御監督して頂きたいとそれのみ心懸けてゐたのでございますが、御見懸申して御願ひ致すといふは、此上もない失禮でございますけれど、多分のお金子を惠むで下さるほどの旦那樣ですから折入つて御願ひ致しますが、私の亡なりました其後で、どうかこの小兒を、何れへなりと奉公にでも遣て下すつて、蔭ながら一人前の人間に成ますやう御監督をお願ひ致したう存じますが、袖振合ふも他生の縁と思召まして、御承知下さる理には行かないでございませうかと、懇々と賴むのです、私も病人の心情を察して、如何にも悶然に堪へなかつたものですから、宜しい及ばずながら、お前さんの身に萬一のことがあつた場合は、身に引受けて何とか方法を講じて遣るから、小兒のことは心配せずに、勇氣を出して、病氣を療養するが宜いと、何程かの金子を與へて歸りましたが、私の推定では、迚も一週日と生存は難いと思ひますから、どうか母親の死去後、あの少年の困難しないやうにして遣りたいと考へまして、それが爲めお願ひするのでございます。」

と委細の事情を物語つた。

「なるほど、それは奇特の至りぢや、さういふ事情なら、使用して遣ることに致やう日中官省へ勸めて、夜間勉强すれば、心懸けさへ宜ければ、いくらか教育を受ける事が出來るであらう。」

子爵も同情を表して快く承諾を與へた。

「それは有難うございます、病母に聞かせましたら、定めて歡ぶことでございませう、私もいくらか依囑に酬ゆることが出來て、誠に安心致しました。」

それを傍に傾聽してゐた露香は、佐分にも增して歡ばしげに、

「では佐分さん、あの新聞賣、お官省へ勸めることに極つたの！」

と問ねた。

「は、閣下へお願ひ致まして、勸めることに極りました。」

「まあ宜かつた、可哀相ですものね。」

と大人びた口を利く。子爵は其顏を見て、得意さうに笑つてゐた。ところへ小間使が入つて來て、

「御支度が整ひましてございますから、皆樣御一緒にお食堂へお越しを願ひます。」

と告げた。

「さうか、では佐分君、一緒に食べやう。」

一同連立つて食堂へ越つた。

末期の微笑

時は二月下院の某日、午後四時過であつた。芝區琴平町の、見るも悒せき裏長家の中で、物いふ呼吸も苦しげに、例の優少年を前に、何事か說き聞かしてをるは、重患の養母お政である。骨と皮のみに瘦せ衰へた顏は、死灰色に沈むで、瞳光もど

んよりと鈍く、唇も紫色に變つて、何樣尋常ならない容體を示してをる。小い軀を行儀正しく坐つた優の顏も不安に沈み切つて、眼には涙さへ差含むでをる。

「いつもいひ聞かしてあるやうに、私は今夜も知れない軀だから、私の亡くなつた後は、佐分の旦那樣へお縋り申して、必ず立派な人間に成らなくつちやならないよ、石に嚙り附いても、歪むだことや、曲つたことを致てはならないよ、新聞賣を續けるにしても奉公に行くにしても、朋輩や友達と喧嘩口論なぞしてはなりませんよ、設令阿母さんは死んだからつて、土の中からお前の爲ることを、大きな眼を開いて見てをりますよ、今夜にも阿母さんが死んで了へば、お前さんは眞箇の一人法師に成つて、廣い……世界に誰一人……世話をして呉れる人は無いんだから、其心算でゐなければならないよ。」

堪へ得られないやうに、止度なく落涙するのであつた。優も耐へかねてはら〳〵と落涙しつゝ、

「僕一人法師に成つても、屹度立派な人に成るから、そんなことを心配せずに、早く病氣を治してお呉れよ、この寒さへ通り越して了へば屹度快くなると、猿田先生が仰つたぢやありませんか。」

と勵ますやうにいつた。

「私もお前一人を遺して、決して死にたくはないけれども、恁う苦しくつては、とゝても全快どころではない、明日の日が難かしいと思ふから、それでいひ遺して置きたいことは、皆ないひ聞かして置くのです。」

と今にも息が絶はせんかと思ふまで苦しさうな呼吸を吐き〳〵いつた。

優は益々不安さうに、

「大層呼吸が苦しさうだから、又加減の好い時に話すとして、お藥服むでお休みなさいよ。」

いひつゝ、水藥を猪口に注いで進めた。お政はそれを服用して、喘ぐやうな呼吸を、暫時熟と沈めやうと努めてゐたが、やがて少に靜つたので、又辭を續けた。

「今更這麼事をいひ聞かしたら、水臭く思ふであらうけれど、お前は私の產むだ小兒ではないので、私には太郎といふ、今年二十歲になる實の小兒があるのだけれど六歲に成る時、行衞が知れなくなつて今日に至るまで、生てゐるものやら、死んで了つたものやら、生死のほどさへ知れない所から、三年目に、岩田竹子といふ產婆の世話で、生れて漸と二月餘り立つたばかりの、お前を貰ひ受けて、この年齡まで育てたのだが、お前の眞實の兩親といふのは、親知らずといふ約束で貰つたものだから、何處の何といふ人だか、姓名は固より、顏も見たことはないけれど、金襴の袋に入つた守刀と、桐の箱に入つた軸物が一幅附いて來たので、大切に納つて置たけれども、火事に遇つた節に、軸物だけは持出したが、守刀だけは到頭燒いて了ひました。素より親知らずで他人へ遺つて了ふほどの親達だから、今日ではもうすつかり忘れてゐるであらうけれど、それでも私が亡くなつた後で、眞實の兩親に會ひ

たいと思ふなら、岩田竹子といふ產婆さんに會つて、斯樣々々だと名乘つて、兩親の名を聞いて見るが宜い。」

といひ了つて、又苦しさうに、胸の邊を撫で下ろす。優は涙ながら、背後へ廻つて靜に脊を擦するのであつた。

優が寸時看護してをる中に、呼吸の苦しさうなのが、やゝ恢復したので、

「もう大丈夫だ、いふだけのことをいつて置かないと、死ぬにも死なれないから、序でにいつて了ひませう……お前佛檀の下の戸棚の中に新聞紙に包むだ箱があるか、出して來てお呉れ。」

と命じた。優はお政のいふが儘、戸棚の中から箱を出して來た。お政は箱の蓋を排けて、中から尺五の一軸を取出した。

「お前これを擴げて御覽、これが唯今話した、お前を貰ふ節に守刀と一緒に附いて來た、紀念の一軸ですよ。」

優は歡ぶ色もなく、いはるゝまゝ擴げた。やゝ古色は帶びてをるが、金色爆然とした金襴表裝に牙軸を附して、中には紙本ながら、生けるが如き羅浮仙を描いて、雪舟と落欵が入れてある。お政はそれを眺めながら、

「私共には、畫の良否は分らないけれども、雪舟といふ人は、名高い畫師と聞いてゐるから、この軸物はお前の實の親だと思つて、一生大切に持つてゐなければならないよ、誰が何といつても、賣つたり遣つたりしてはなりませんよ。」

懇々と戒めるのであつた。

「阿母さんが大切に持つてをれといふなら、死ぬまで大切に持つてゐるけれども、こんな軸物よりか、今阿母さんの話した。太郎といふ兄樣がゐて下れると、僕何より嬉しいけれど、何處に往つたんでせうね。」

お政は追懷の念に堪へぬやう、

「私も時々然う思ふのだよ、太郎が生てをれば、丁度二十歳になるから、お前と二

人仲好く働いて下れたら、元の高木に恢復されるであらうにと……しかし私の考へでは到底生てゐないと思ふけれど、萬一生てゐたところが、十五年も以前のことだから、分りつこはありませんよ。」

絶望したやうにいつた。

「一體兄さん甚麼顔してゐたの、阿母さんに能く肖てゐたの？」

「私よりか、亡くなつたお父様酷似だつた、がしかし大きくなれば變るものだからどんな男に成つてるか、途中で逢つたからつて、分りつこはないけれど、右の耳の下に指の頭ほどの黒痣があつたから、それを目的に捜すより外に手懸はないね。」

「僕これから一生懸命に、其痣を目的に捜して見るわ。」

「捜したからつて知れるものぢやありませんよ、生てゐたら何れ支那人の手にでも賣渡されて、遠い國へ遣られてゐます。」

と愈よ絶望したやうに打消したが俄に吁と叫んで苦み出した。優は吃驚して顔色を

變へながら、

「阿母さんどうしたの……えゝッ阿母さん……」

と取縋つた。お政は齒を食ひ締つて物をもいはず苦しむのであつた。優は例の苦みやうと樣子が異つてをるので、うろ〳〵しながら、遂に救を隣家へ求むるのであつた。

「お隣の小母さん、阿母さんが惡いから來て頂戴な……」

と聲を限に叫ぶのであつた。ところへ突如として、

「何うした、阿母さんが惡いのか。」

と聲を懸けて入つて來たのは、佐分書記官であつた。優は地獄で佛尊に會つたやう涙の中にも力を得て、

「は……はい、阿母さんが急に惡くなつて、物をいはなくなつたんです。」

佐分は手早く靴を脱ぎ捨てゝ、惡臭に充ちた病床へ進み寄つた。が、見れば、も

う殆んど知覺を失ふて、今にも呼吸が絶なん狀態である。

「早く水を持つて來い、早く〳〵……」

と優に命じた。

佐分の命に、優は手早く茶碗へ冷水を汲むで來た、佐分は其間にポケットを探つて、持藥の寶丹を取出してゐたが、早速に茶碗の中へ寶丹を入れて、指頭で混和した後、お政の口中へ注ぎ入れて、强ひて嚥下させた。そうして耳元に口を寄せて、

「氣を確に持たなきや不可いよ、宜いか……」

と聲に力を罩めて叫んだ。其聲が耳に徹したか、鈍いながらも眼を瞪いた。

「唯今醫師を招んで遣るから、苦しくとも氣を確に持つて我慢致なければならないよ。」

と重ねて勵ました。お政は其聲を辿るやうに、どんよりと濁つた眼で佐分の顏を眺めるのであつたが、意識したやう、滿足の色が鈍い眼に表れた。

「分つたか、私は佐分だよ。」

顏を覗くやうにいつた。お政は懶氣に首肯いて、兩手を合せて感謝の意を表した。意識する力があると見た佐分は、再び耳元に口を寄せて、

「優を外務大臣附の給仕に使つて頂くやうにしたから、安心するが宜いよ、分つたかね。」

と告げ知らせた。お政は其辭を聞くと等しく、再び兩手を合せて、感謝の意を表すると共に、氣が緩むだのであらう、微の笑を唇頭に泛べながら、又も正氣を喪ふて了つた、佐分は吃驚して、

「おい氣を確に持て、おゝい、おゝい。」

と呼び活けるのであつた。が、微な痙攣を起すと見る間に、呼吸も脈も眞箇絶えて了つた。優はと見れば佐分がゐるために、多少の力は得たものゝ、それでも涙を流しながら、起ちつ居つ、座にも堪へないばかり、氣を揉むでゐた、落命と見た佐分

は到底蘇生の見込はないけれども、優に向つて、

「お前はね、阿母さんが太く惡いから、直に來て下さいといつて、例も診て貰つてるお醫者を呼んで來な。そうして家主と、近所の知つた人にも、阿母さんが惡いから來て頂戴と、さういつて賴むで來な。」

といひ聞かせた。

「旦那さん、もう阿母さんは徒目でせうか。」

と啜り上げながら問ねた。

「もう救からないかも知れないが、何しろお醫者さんに診て貰はなければ、判然と分らないから、早く往つて迎へて來るが宜い。」

「では直に呼んで來ますから、相濟みませんけれど、暫時どうぞお願ひ致します。」

賴むで置て出て往つた。佐分はとんだ塲合へ來合したと思はないではなかつたがしかし優に同情の餘り迷惑する容子はなかつた。

お政の亡體に、同情の眼を注ぎながら、不斗傍を見ると、家に相應しからない、金襴裝飾の一軸が擴げた儘にあるのが眼に着いた。不審に思ひながら落欵を眺めると、雪舟と記されてある。益々不審に感じつゝ、靜に卷いて傍にあつた箱へ納め入れた。

「瀕死の病中に、何故掛物など出して擴げてゐたのか知ら、第一雪舟の軸物なぞが此家にあるべき所以がない、それも坊間にあり觸れた、僞物ならばだが、どう眺めても眞筆らしく思はれるのに、表裝だつて完全に出來てゐるし、實に不可議千萬だね。」

「這麼事を考へてをる中に、早くも優が歸つて來る、續いて家主であらう、五十七八の禿頭の老人が入つて來た。

「お醫者はどうした！」

佐分は問ねた。

「は、直に往つて遣るといはれました。」

すると件の老人が、

「唯今この小兒から承はれば、貴方樣は外務省とかの旦那樣ださうでございますが種々と御親切に預りますさうで難有うございます、私は家主の小坂吉兵衞と申すものでございます、唯今病人が太く惡いと聞いて參りましたが、如何でございませう？」

佐分は打沈むだ調子で、

「私は佐分といふ者ですが、不思議な關係から些と訪ねて來たところが、病人が非常に苦悶してゐた折柄であつたのだから、見るに見かねて、手傳つて看護して遣つてをる中に、容體が漸次不良に陷つて、どうやら恢復の見込がなくなつたものですから、兎に角醫者を呼んで診斷爲せやうと、唯今呼に遣つたところです、氣の毒ながら、もう殆んど脈も絶えて了ひました。」

と挨拶した。吉兵衞も駭き顏に、

「えゝッ、それではもう恢復の見込はございませんか……隨分長病で衰弱致切つてゐましたからね、さうですか……それにしても萬一といふこともあるものですから、一應はお醫者樣に診て頂かなくては成りませんが、早く來て下されば宜ございますにね。」

彼是話の中に、近所隣家の人々が二三人見舞に來た。

「優ちやん阿母が大層惡いさうだね可哀相にね。」

甲の婦人がいへば、乙の婦人は家主の吉兵衞を見て、

「家主さんでございますか、お政さんがどうも良くないさうでございますてね、本當にお氣の毒樣ですわね。」

と挨拶しつゝ、病床の方を眺めて、

「大層靜かにお寢つてるぢやありませんか。」

すると吉兵衛が、

「寢むでゐるのならまだ〳〵脈があるけれども、もうどうやら佛に成つた樣子だから、お醫者樣を待つてるのですよ。」

と答へた。

「えゝッ、それではもう徒目なんですか。やれ〳〵お氣の毒な……さうですか、昨日までもまだ那樣容子はなかつたのですがね、お醫者樣へは誰方か往らしつたんですか。」

「先生は私がお迎へに往つて來たんですが、直に往つて遣ると仰やつたんです。」

優が答へた。いふ辭の了らない所へ、主治醫の猿田欣齋が、てく〳〵と入つて來た、一同はそれと見て、恭しく迎へた、欣齋は會釋しつゝ直に病床へ進み寄つて、顏色を一目見るより眉を顰めたが、直に手を握つて脈搏を診るのであつた。引續いて胸の邊を押へて見たが、幾分の體溫は在りながら、呼吸も脈も全く絶えてゐるので、

「もう絶息して了つてゐますから、何とも手の下しやうがないです。持病のリヤウマチスで、衰弱致切つてゐるところへ、心臟痲痺を起した爲に、かういふ結果に至つたのです、お氣の毒ながら止を得ませんから、診斷書を認めて置きますから、後刻誰方か御苦勞を願ひます。」

と一同へ會釋して歸つて往つた、先刻から默然として控へてゐた佐分は、吉兵衛に向ひ、

「今更何といつても致方ないですから、御厄介でせうけれど、後々〳〵の事、御近所の方々と御相談なすつて、然るべく取斗つて遣つて下さい、甚だ輕少ですけれど、亡き人への香花料として、十圓だけ進呈して置きますから、送葬費の補にして遣つて下さい。」

と十圓紙幣を取出して吉兵衛へ渡した。

「左樣でございますか、それでは優坊に代つて私が頂戴して置きますでございます何しろこの小兒が孝行者で、病人の藥價を始め、何から何まで家の經濟を一人で遣つてゐたのですから、十錢の貯蓄とてもないのですから、御近所の方々と相談致まして、形ばかりの葬式でも、野邊の送だけは致さなければなりませんから、澤山の御香奠を頂きまして、どんなに仕合か知れないでございます。」

と押戴いて受けた。

「それでは私は失禮致ますから、何分宜しく賴みます。」

と佐分は歸り去つた。

意外の電話

「はい〳〵、此方は伊藤ですが、貴方は誰方樣……佐分樣でゐらつしやいますか……左樣ですか、私は小間使の花でございます……はい〳〵、それでは直に奥樣へ然う申上げますから、寸時お待を願ひます。」

と伊藤子爵邸の電話室を出て、急いで子爵夫人の部屋へ伺つたのは、小間使の花であつた。恭しく兩手を突いて、

「唯今佐分樣からお電話でございまして、今晩帝劇へ御供致すお約束でございましたけれど、此方からお歸りがけに、新聞賣の小供の家をお訪ねに成りましたところが、病氣の母親が到頭亡くなりましたので、時刻が遲れましたから、殘念ながら今晩は失禮致しますから宜しく御詫申して下れと、恁樣に仰せに成りましたが、如何御挨拶致しましてお宜しうございませう。」

「では、まだ電話切らずにあるのかい。」

「はい、左樣でございます。」

「それではね、もう席が取らしてあるんだから、少々遲くなつても入來しやらないかと然う申して御覽な、それでも御都合が惡いと仰しやれば、止を得ないからね。」

「畏りましてございます。」

とお花は立去つた。お花の辭を夫人の傍で聽いてゐた露香は、小兒ながらも心配相な顏附をして、

「ね母樣、可哀相ですね、新聞賣の小兒何うするのでせう、唯た一人の母親に死なれて困るでせうね。」

咲子夫人も同情して、

「眞箇だね、親一人子一人だといふのに、十三やそこいらで、唯た一人の母親に死なれては、木から落た猿のやうなものだから、途方に暮れてるでせうよ。」

「新聞位を賣つて、どうにか其日を送つてゐたのですから、お葬式出すことも出來ないでせうが、佐分さんが何とか致てお遣りなすつたでせうかね。」

「さあそれは知れかねるけれど、親戚が在るでせうから、何とかするでせうよ。」

「いゝえ母樣、親戚は一人も無いんですつて、眞箇の親一人子一人だと、何時やら

の新聞に詳しく書いてありましてよ。」

「然うかね、それでは困るでせうが、しかし近所隣家の人が、何とかしてお葬式だけは出して遣るでせうよ。」

折しも先刻の小間使が來て、

「然う申上げましたら、それでは後から必ずお伺ひ致しますから、宜しく申上げて下れと仰やいました。」

と佐分の返辭を告げた。

「然うかね、宜し〳〵。」

ところへ由緣が入つて來て、

「母樣、もう出かけなければ、開演の間に合はなくはないでせうかね。」

「自働車で往けば十分で往けるんだもの、これから御支度して出かけると、丁度好加減です、お前さんも露さんも、何時でも出かけられるやうに、御支度なさいよ。」

「宜ござんす、直に致ますわ、露ちやんも入來しやいな。」

すると露香は、物案じらしい風情で、

「母樣、私お芝居は止しますわ、其代りに特等で觀るだけのお金子頂戴な、えゝ宜いでせう。」

と意外なことをいひ出した。

「まあ可笑な露さんだね、觀劇を止してまで、それつぱかりのお金子を何にするの？」

「だつて、私一人に三圓以上要るでせう、そのお金子を頂いて、私の貯金から引出して拾圓にして、新聞賣に持つて往つて遣るわ、屹度お葬送することが出來なくつて、困つてゐるに相違ないわ。」

益々意外なことをいひ出したので、咲子も由緣も、共に駭きの眼を瞪つた。

慈善心に篤い咲子夫人は、健氣な露香の同情心に動かされて、

「それほどお前が可哀相だと思ふなら、演劇に往くのを舍さなくとも新聞賣に遣るお金子は、私から出して遣るから、明朝學校へ往きがけに、お前が持つて往つてお遣りなさい。」

と勵ますやうにいつた。露香はこの辭を聞くと等しく、如何にも歡ばしさうに、

「母樣、本當に與つて下すつて？」

「本當ですとも、お前さんが芝居に往くのを舍してまで、困つてゐる者を救けて遣るといふのだもの、屹度上げるから、安心してゐらつしやい。」

「何うも有難う、十圓のお金子だつて、屹度歡ぶことよ、一錢宛の新聞を賣つて、御飯を頂いてるんですからね。」

露香の歡ぶ顏を見た由緣は、

「それではね露さん、私も五圓だけお香奠に遣るから、母樣のと一緒にして持つて往つて頂戴な、眞箇可哀相だからね。」

「然う姉様も遣るの……どんなに歡ぶでせう、私成たけ早く起きて持つて往つて遣るわ、お葬式が出來なくて困つてゐるかも知れないからね。」

「さあ〳〵其相談が極つたら、早くお支度致なければ、遲くなりますよ。」

と夫人が促した。

「では私も往つて宜ございますか。」

と露香が問ねた。

「え、〳〵宜ございますとも、那樣遠慮には及ばない事よ、さつ〳〵とお支度なさい。」

露香は安心したやう、由緣と共に室を出たが、やがて美しく化粧した上、盛裝して夫人の部屋へ來た。其時夫人も既に準備が整つてゐたから用意を命じて在つた自働車へ同乘して、帝國劇場へと赴つた。一行が定めの席へ入つて、椅子に腰を掛けるが否や、音もなく靜に緞帳を捲き上げた。藝題は三木文學博士の翻譯に成つた（親

なき兒）の悲劇と（周章者）と題する喜劇とであつた。

プログラムを手にした咲子夫人は藝題を見るが否や、露香が同情した彼の新聞賣の孝行が身の上を思ひ浮べずには居られなかつた。同時に露香が、

「母樣、親無き兒といふのですね、何だか先刻話した新聞賣見たいぢやありませんか。」

と淋しく笑つた。

「演劇を觀なければ分らないけれども、藝題だけ見ると、新聞賣見たいな、憐れな小兒のやうに想はれるわね。」

「屹度親の無い小兒が、苛められる可哀相な演劇なんですよ。」

といふ中に、舞臺へは獰猛の顏をした、髯むちやの男が、一疋の犬と一疋の猿とを連れて、上手から上場して、而うして上手の方を延び上つて見込みながら、何事か呟いて路傍の石垣に腰を掛けると、犬と猿とが睦み合つて戯れる。髯むちやの男は

怖い眼を光らかして再び上手を見込むで、

「何といふ意氣地の無い餓飢だらう、今日はまだ屋根代も稼がねへ癖に……」

と弗々と罵つてゐると、上手から十一二かと思はれる、可憐の少年が跛足を引きながら、如何にも疲勞したといふ態度で、古びた一挺のヴヰオリンを肩に掛けて出て來た。見るより髯男は、

「何をさらしてゐやがるんだい、まだ屋根代も稼がない癖に、怠けやがると打擲るぞ。」

と睨み附けた。少年は不平顔して、

「だつて脚の疵が痛くて歩けないんだもの、こんなに腫れ上つたから……」

と破れた半窄袴を捲り上げて、疵所を見せた。

「其位の疵が何となるか、痛い〳〵と思ふから痛いのだ、怠けると承知しねへぞ。」

髯男が少年を叱り附けてゐる折柄へ、下手の方から洋裝の紳士が、美しい令嬢と

共に上場した。それと見るより髯男は、忽ち乞食聲を作つて、

「若うし、旦那樣お嬢樣、これは平生仲の惡い、猿と犬との舞踏にござります、これにをります小兒のヴワヰオリンに合せて、手拍子揃へて踊りますところを、どうか御見物下さいまし。」

と口上を述べて憐を乞ふたが、紳士は一眄もせずさつさと通り過て了つた。髯男は聲を張上げて、

「私にばかり喋舌らせて、肝心の貴樣が賴まないから、知らない顏をして往つて了つたぢやねいか、何を茫乎してゐやがるんだ。」

いふより早く、少年の横面を、力任せにびしやりと張飛した。見上げるほどの大男に、力任せに擲られて何とて其儘に堪へ得られやう、ヴワヰオリンを手にした儘三尺ばかり其に俯伏せに倒れた。髯男はまだ飽足らぬと見えて、所管はず破靴の儘蹴り附けた。少年は疵所を蹴られたと見えて、忽ち悲鳴を上げて泣き出した。

この演劇を傍目も觸らず、一心に眺めてゐた露香は、憐れな少年に同情を寄せて早くもハンケチを取出して、頰に傳はる涙を拭ふのであつた。

「彼の小兒が親無兒か知ら……」

と咲子夫人が誰にいふともなくいつた。すると露香が、

「屹度然うよ、可哀相ぢやありませんかね、那麼酷い目に遭つてさ。」

「では、彼の髯男は何うした關係か知ら……」

話の中に舞臺上の少年は、痛を忍んで起上つたが、脚部の疵から血潮が流れ出るのが土埃で汚れた白い靴足袋を染めてゐた。

「……これから一生懸命に稼ぎますから、どうぞ……か、かんにんして頂戴。」

と涙ながらに詫つた。髯男は卷莨をすぱすぱ燻らして、元の石の上に腰を掛けてをつたが、嶮しい眼を睜つて、

「貴樣のやうな怠け者は、蹴殺したつて管はねへや、能く考へて見ろ、兩親は死ん

で了う、親戚の者はなし、食べることも出來なければ、寢る家もなくて、日本橋の上で、お腹を減らしてめそ〳〵泣いてゐたのを、慈悲深い私が通りかゝつて燒芋を買つて食はして、自宅へ連れて歸つて、種々と藝を敎へて、どうにか食べて行けるやうにして遣つたのぢやねへか、其大恩を忘れて、やゝともすると、やれ脚が痛いの、手が痛むのと怠け根性を出して、働かないから、今のやうな手荒い折檻をするのぢやねいか、其脚の疵だつて然うぢやねいか、私を怒らせなくても濟むことを、怒らすやうにするから、到頭擲られて那樣疵が附いたのだらう、何も彼も皆な怠ける罰が當るのぢや、一生懸命に稼ぐといふなら、堪忍して遣るから、其代り夕方までに、一兩のお金子を稼がなければ、御飯も食はせなければ、蒲團の中へも寢かさねへぞ、宜いか。」

「腕の續く限り唄ふて彈くから、どうか勘辨してお呉れ！」

「それぢや、戻と初とを連れて、早く往け往け！」

房とは犬の名で初とは猿の名である。

「房ちやん初ちやんを乘せて遣れ。」

少年が命令すれば、犬は猿を脊に乘せて歩み出した。少年も跛足引き〳〵後から歩むのであつた。髯男は其姿を見送つて、爲濟したといふ表情をするので、其幕の終を告げた。

「彌張あれが親無兒だつたのね。」

と咲子夫人が露香にいつた。すると由緣が突如に、

「母樣國弘さんが來て居てよ。」

と駭き顏にいつた。

「えゝッ國弘さんが!?」

と咲子夫人も有繋に吃驚の眼を瞪つた。

「姉樣何處に!」

露香も問ねた。

「向の二階に、若い女の方と御一緒にゐらつしやるわ……分つたでせう。」

由緣が視線を注いで知らせた。兩人は其方向を眺めてゐたが、漸く眼に留つたやう、

「眞箇だね、私共の來てゐるのを、知らないのか知ら……」

咲子夫人が眺めながらいつた。

「まだ氣が注かない樣子ですよ、先刻から氣を注けてゐるけれども、那樣容子なんですもの……」

「傍に列んでゐる女は、一緒に來たお連なのか知ら……」

「屹度さうだわ、頻りに話合つてゐるんですもの……」

「鹿造さんの下宿には女なんかゐない筈だのに、何處の女か知ら……」

とオペラ眼鏡を取出して眺めるのであつた。

「下宿の娘や何かぢやなくつてよ、なか〳〵美しく着飾つてるんですもの……屹度相當の家の娘さんだわ。」

由緣が想像を述べた。眼鏡で眺めてをつた夫人も、同意したやう、

「成程立派な樣子をしてをるところを見ると、下宿屋風情の娘では無さ相だが。一體何處の女か知ら……豈夫藝妓ではあるまいがね。」

「國弘さん頑固さうなことといつてらつしやるけれども、當にはならないことよ、軍人は隨分遊に往くつてますもの……」

「私共が來るとは知らずに來たのであらうけれど、惡いことは出來ないものね、それと知つたら極が惡いでせうよ。」

「氣の毒ですから、眺めないで置きませうね、折角愉快に觀てゐらつしやるのが、それと知れたら厭に成るでせうから……」

「いづれは先方でも氣が注くでせうけれど、知らぬ顏してゐるが宜いわ。」

「それはさうと、佐分さんどうなすつたんでせう、隨分遲いぢやありませんか」

由緣が想ひ出したやうにいひ出した。

「屹度新聞賣の小兒の家を出てから家へ歸つて往つたのよ、それでなければ、もう來なくちやならないからね。」

「もう彼是一時間と十分經つのですもの、自宅へお歸りなすつて、それから御出かけなすつても、もう入來しやらなければならない時刻ですがね。」

「遲くなつても必ず任くと仰やつたさうだから、屹度入來しやるに相違ないわ。」

咲子夫人がかう答へた、其辭の終るか終らないのに、案內者に導かれて佐分が入つて來た。見るより露香は、

「佐分さんのお席此方よ。」

待詫びたやうにいつた。佐分はフロックの姿勢正しく、

「大變遲刻して申譯がございません。」

咲子夫人へ挨拶して定の席へ入つた。

「唯今一幕濟んだところです。」

「左樣ですか、それは殘念でした、實はお宅からの歸るさに、彼の新聞賣の少年を訪ねまして、官衙へ勤めるやうに成つたことを、知らして遣らうと存じまして、家を訪ねました所が、生憎病中の母親が、九死一生といふ、瀕死の折柄であつたものですから、去るに去られず、到頭息を引取るまで傍にをつて、加之に葬儀のことまで家主に賴んで遣つて、漸く立去るといふ狀態で、意外に遲く成つたものですから御約束に背くのは甚だ恐縮ですけれど、私ゆえに御迷惑かけては相濟まないと存じまして、御斷りの電話をかけた次第ですが、意外事から遲刻して、眞箇相濟まないでした。」

佐分が入つて來た時は、幸ひ幕間であつたから、他の觀客に何の遠慮もなく、遲刻の理由を喋々と語るのであつた。咲子夫人は如何にも新聞賣少年に、同情を表す

るかやう、

「先刻の御電話で承知致しましたが、親一人子一人ださうですから、後に遺された小兒が可哀相ですね。」

由緣と露香とは、熱心に兩人の談話を聽いてゐた。

「眞箇可哀相なものですしかし、閣下に御願ひして、官衙へ使つて頂くやうに成りました事は、瀕死ながらも承知して死にましたから、何程か安心した事と考ます。」

「まあ左樣でしたか、それは好い都合でしてね……して葬儀は何日でせう！」

「葬儀と名の附くやうな儀式なぞ、到底營めるものではございませんが、左に右明晩か明後未明に營むやうに申してをりました。」

「何うにか葬儀が出せるでせうかね。」

「家主を始め、近所隣家まで、非常に同情を寄せてをりますから、どうにか野邊の送だけは爲て遣る事と考へます。」

「實は露香が大變に同情して、演劇は觀なくとも宜いから、それだけの觀劇料を、御香料に遣りたいといひますので、それほど氣の毒に思ふなら、觀劇は舍さなくとも宜いから、何程か遣るが宜いといつて、明日露香が自分で持つて注く事に極めてるんですよ然ういふ、境遇であつて見れば、いくらか足しに成りますからね。」

「左樣ですか、それは甚麼に歡ぶか知れないです、眞箇赤貧洗ふが如き狀態ですからね、私も本の僅か計りでしたけれども、佛前へ供へて遣りました。」

此時露香が遮るやうに、

「佐分さん、この新聞賣、これから一人になつてどうするの！」

心配さうに問ねた。

「お父樣にお願ひ申して、官衙へ使つて頂く筈に成つてゐますから、どうにか食べて行く事だけは出來るでせう。」

「だつて、一人に成つて了つたんですもの、官衙へ出るといつても、留守居が無い

ぢやありませんか。」

「それは無論外に誰もゐないですから、家は返して了つて、何處かへ下宿でもするのであらうと思ひます。」

「可愛相だわね、何處か下宿する家があれば宜いけれど、無いと困るわね。」

「あんな優しい小兒ですから、賴めば誰か下宿さして遣るでせうと思ひます。」

露香がかういひ了らない中に、由緣が消魂しい調子で、

「母樣々々、國弘さんが到頭見附けて、あんな怖い眼附して眺めてゐてよ、まあ密と御覽なさいまし。」

この聲に露香も佐分も談話を打消されて、一同視線を彼方の二階へ注いだ。

「まあ、彼の怖い顏、どうして那麼怖い顏して見てるんでせう、私共が觀劇に來たからつて、何も那麼顏するに當らないぢやないかね。」

と咲子夫人も不服さうに呟いた。

「屹度かうなのだわ、自分が婦人と一緒に來てるものだから、私共が邪魔に成るからですよ。」

由緣が想像していつた。

「那樣事かも知れないね、然うでもなくつちや、怒る道理が無いんだからね。」

咲子夫人が同意した。佐分は默然として母子の話に耳を傾けてをつたか、國弘の怒るのは他に原因があるのだと、獨り想像を回らしてをつた。折柄開幕の知らせに鈴の音が鳴り渡つた。同時に今まで殆んど空席であつた觀客席は、見る〳〵間に着席して、種々の香氣が場内に浮動するのであつた。

少年と少女

帝國劇場へ觀劇に往つた翌朝、露香は拾五圓の金子を奉書紙に包むで上に御香料と認め、水引まで掛けて帛紗に包み、例も學校へ往く時刻より、少し早目に家を出て、彼の新聞賣少年の不幸を慰問すべく、其家を訪れた。かくまで汚穢しい住居とも思ひがけなかつた彼女は、異臭鼻を衝くばかりの裏長屋である上に、人の住居といふは眞箇の名ばかりで、軒は傾き、壁は落ち、疊は破れ、障子すら骨のみといふ狀態に、些と駭かないではなかつたが、しかし其日、暮の貧しい身の上と承知してゐるから、深く感じた樣子もなく、憶する色もなく泥に塗れた入口を入つた。内では優少年が殊勝氣に、亡骸の前に悄然座つて、守護してをる外、近所の女らしい、五十ばかりと三十五六との二人が、喋々話ながら皿小鉢を洗つてゐた。露香の姿を認めた優少年は、つか〳〵と出迎へた。

「お嬢樣ですか、先日はどうも有難うございました。」

と挨拶した。二人の女は、この意外な訪問者に、少からず驚の眼を瞪つた。

「佐分さんから聞いたら、到頭母樣が亡くなつたのだつてね。」

露香も大人びに挨拶した。

「快くなるとばかり思つてゐましたら、到頭亡くなつて了ひました。」

「本當にお氣の毒だつたわね、昨晩聞いたものだから、直に來やうと思つたけれど皆なと一緒に他所へ往つたものだから、それで今朝學校へ往きがけに一寸お寄りしたのよ、これね本の少しだけれど、母樣へ御線香でも買つて上げて頂戴な。」

と例の紙包を取出して渡した、優少年は露香のいふに任せて、敢て辭退する樣子もなく、

「何うも有難うございます。」

押戴いて受取つた。

「佐分さんから聞いたら、お官衙へ勤めることに成つたのだつてね。」

「は、佐分さんがお願ひして下すつたので、勤めることに極つたのです。」

「お父樣が出てゐらつしやるお官衙だから、時々私の家へもお使に來ることがあつてよ。」

「然うですか、どうか宜しくお願ひ致しまし。」

「ぢや失禮するわ、さよなら……。」

「どうも有難うございます。」

衣摺の音も優しく、靴の運もいと輕やかに、露香は立去つて了つた。呆れ顏して少年少女の應答を聽いてゐた、二人の婦人は、露香が去るが否や、待佗たやう、

「ね、優ちやん、今のは何方のお嬢樣？　大層可愛いお嬢樣ね。」

若い方の女が問ねた。

「僕お屋敷は知らないけれども、伊藤樣といふ大臣のお嬢さまなんです。」

「へえ……大臣のお嬢樣！？　大變な方にお知巳があるんだね、何うして知つてるの！」

「この間僕が仲間の新聞賣に、酷い目に逢つてる所を、昨晩お入來になつた、佐分さんや、今のお嬢樣が通りかゝつて、救けて下すつたので、それで知つてるんで

す。」

「まあ那様お知合だのに、態々悔にお入來下さるなんて、本當にお前さんは僥倖者だよ、ねお松さん。」

「それといふのが、彌張親孝行の德ですよ、しかし有繋に大臣のお嬢様は違つたものだね、まだ十三か十二位だのに、お一人でお悔に入來しやるんだからね、お怜悧なもんだね。」

年增の女が感服したやうにいつたところへ家主の吉兵衞が入つて來た。

「今この裏から、十二三の可愛い娘ッ兒が出て往つたが、あれは何處の娘か知ら、この裏長家にあんな娘ッ兒は見かけたことがないやうに思ふがね。」

と不思議相に問ねた。

中年增の女は得意さうに、

「まあ旦那もお會ひなすつたんですか、御存じのこの裏長家に、あんなお嬢様がど

うしてゐるものですか、私共も折角唯今お噂をしてゐたところなんですよ、あれは何とか大臣のお嬢様で、優ちやんのお知己だから驚くぢやありませんか。」

吉兵衞は風呂敷包を手にした儘、

「優坊のお知合ですか、道理こそ見かけたことがないと思つた。すると優坊を訪ねて來たんですか。」

「貴方お香奠をもつて、態々お悔に入來しつたんですよ。」

「然うですか、優坊なか〳〵良い知合がありますね。」

言ひつゝ優に向つて、

「あのお嬢様は何方の方だい。」

「お家は知らないけれども、昨夕お入來に成つた、佐分さんが勤めてゐらつしやる外務省の大臣のお嬢様なんです。」

と優が答へた。

「すると外務大臣の伊藤子爵のお嬢ちやんなんだね。」
「屹度然うでせう、僕能くは知らないんです。」
「お香奠まで持つて來て下さるんぢや、餘程古くから知つてるんだらうね。」
「いゝえ、ツイこの間からです。」
すると中年増が間怠つこげて、
「先達て新聞賣に出てゐて、仲間の者に苛められてる所を、昨晩入來した方や、今の御姉妹が通りかゝつて、救けて下すつたのがお知己の始めださうですが、そればかりのお馴染で、故々お悔に來て下さるといふのは、結局この人が親孝行をするものだから、幸福が自然と向いて來るんですよ、何にしても孝行といふことはしたいものですね。」
口早に喋舌つた。
「然うですか、しかし大臣の娘さんなぞといふものは、なか〳〵我任、意なもので、

一寸出るにも、馬車や自働車で出かける方が多いのにこんな汚ない裏長家へ、お供も連れずに、てく〳〵歩いて來るなんて、感心な娘さんだね、大臣の家から下すつたんでは、御香奠も五圓位は入つてるぢやらう、包に何程と記してあつた。」
葬儀萬端の責任が、自分の責任と成つてゐるだけに、斯く問ねたのであつた。
「僕見ないで、机の上に載つけて置きました。」
「然うか、慾氣のない奴だね。」
言ひつゝ吉兵衛は、位牌の前に供へてある香料の包を取上げた。
「ふむゝゝ有繋に違つたものだな、此方徒等と違つて、大臣のことだから、豈夫二圓や三圓ぢやあるまいが、そればかりのお馴染なら、五圓より多くはあるまいと思つたに大枚十五圓入つてる、これでまあどうにかお葬式が出せることに成つた。」
和々顔でいつた、すると中年増の女が、
「それでは家主さんも大助かりですね。」

「どう儉約して見ても二十五兩なくちゃ出せないから、とんだ災難に罹つたと思つて、内々胸を痛めてみたが、この分ぢや大した迷惑しなくとも、少かばかりで濟みさうです。」

「それは何より結構です、お政さんだつて、お葬式に迷惑かけては、浮ばれないかも知ませんからね。」

「まあ〳〵然ういつたやうな理ですね、優坊お葬式でも濟んだら、お邸へ上つて能お禮申すが宜いよ。」

「は、僕お禮に往きます。」

「辛と警察署へ往つて、埋葬認許書を貰つて來たから、これで明日の朝は、夜の明けがけに出して了うんだね。」

「どうも有難うございました、これで僕も安心しました。」

開芳亭

四谷荒木町の待合開芳亭の一室で津の上藝妓藤廼家の小藤を相手に、酒酌み交してをるは、彼の國弘大尉であつた。大尉は以前から小藤と馴染を重ねて、俸給の全部を殆んど遊蕩費に消失して、剩さへ何程かの負債すら生じてをる。

夜は更けて十二時過でもあらう。この界隈は花柳界であるだけに、何れの料理屋何れの待合も、電燈の光煌々と日中を欺くばかり、遊客の騒ぎ狂ふ聲が、所々から起るのであつた。國弘は此日伊藤子爵家を訪ふて、令嬢由緣との結婚に就いて、叔父なる子爵に會つて、手詰の談判を試みたが、其形勢が頗る不良であつた爲に、確たる返答を明日受ける約束して歸つたものゝ、到底結婚の望が遂げ得られない心地がするので、快々として下宿に歸る勇氣も出ず、自棄半分に開芳亭へ入つて、小藤を招んで小酌を催ふした後、連立つて帝國劇場へ往つたが、豈斗らん帝國劇場で、

子爵夫人を始め、由縁や露香等が、佐分外務書記官と共に來てゐたのを見て、胸がむかむかするほど嫉妬が燃えて、佐分が戀の敵のやうにも思はれた、同時に又自分へ對する結婚を否定する傾向が見えるのは、佐分といふ戀敵が顯れた爲ではあるまいかとも疑つた。かく國弘が疑ひを起すに至つたのは、種々の原因がないではなかつた。第一佐分は風采が立派で、青年外交官中、稀に見るの俊才であることを耳にしてをるのに、昨年の大夜會では、由縁と手を把り合つて舞踏したことも聞いてゐた、のみならず、伊藤子爵が望を囑して、故々任地から呼戻して、秘書官に任じたことも知つてゐた。彼是を綜合して見ると、どうも佐分が怪しく思はれて、由縁と樂しさうに話してをるのを目擊すると、堪へられぬ憤怒を催ふさずにはゐられなかつた、それゆゑに閉塲すると共に、早々車に乘つて、再びこの開芳亭へ歸つて自棄酒を呷るのであつた。

かゝる、懊惱と不平とが、國弘に在らうなどとは夢にも知らない小藤は觀劇の跡を

夢を追ふが如く辿つて、頻りに劇談を試むるのであつた。序に記して置くが、小藤は細長い上品な顏で、色も白く髮も濃く、些と見ると良家の令孃かと見紛ふほどの品格を備へてゐる、年齡は二十一で生れは神田神保町であるといふことである。

「有繋に高麗家は旨いものですね、あれほどの俳優は何處へ往つても見られませんわね。」

と小藤が幸四郎を賞めた。

「私は芝居を觀ることは好きだが、役者なぞ眼中にないから、どれが誰だか少しも分らない、高麗家といふのは、何をした俳優だ。」

「あら高麗家を御存じなくつて！　松本幸四郎のことだわ、親なき兒の慈善家をやつたのがさうですよ。」

「は、あれか、お前のいふほど旨くはないけれど、まあ〳〵普通には見られるね。」

いひ了つて凝乎と空を瞻めて思案に沈むだ。小藤は劇談の相手に成らないと思つ

たか、敢へて論議致やうともせず、笑顔を作つて、

「貴方何を考へてゐらつしやるの、どうかしてゐらつしやるのね、帝劇へ往つても初中終考へ込んでばかりゐらしつたぢやありませんか屹度私に愛相が盡きたんでせう、えゝッ、さうぢやなくつて？」

國弘は我に歸つたやう、

「お前に愛相が盡きたのなら、寧そ心配がなくなつて安心するけれども、一日も早く約束が果したいと思つて、それで心配しとるのだ。」

「那樣にお急ぎなさらなくつても、私貴方の方の都合の好くなるまでかうして勤めてゐますから、無理なさらないが宜いわ。」

「別段に無理は致ないが、豫て話した叔父が頑固で、藝妓なぞと夫婦に成るなら、絶縁するといふからそれで閉口してるのだ。」

「叔父樣と仰やるのは、外務大臣を勤めてゐらつしやる、あの方なんですか。」

と小藤が問ひ試みた。

「大臣を勤めてる彼の叔父だよ、何しろ今日では華族には成る、財産は有る、勢力は持つてをる、殆んど親戚間の中心に成つてるものだから、彼叔父が不可いといへば、親戚中が不可いにして了ふんだから、何うあつても彼叔父を承諾させる必要があるので、諄々と說いてはゐるけれども、なか〳〵諾といはないので困つてるのだ。」

國弘は痕方もない僞りをいひ聞かせた。何故に國弘がかゝる、虛構の事實を吹聽するかといふに、この小藤と國弘との中には、馴染の當初に、末は必ず結婚するといふ條件が、國弘から提出されて、それが爲に關係を結ぶに至つたのであるが、其實國弘の心中には、それを實行する念慮は、少しも無かつたのである。けれども小藤の方では、陸軍大尉の夫人に成るのを名譽として、一日も早く落籍したいと、未來の良人として、心の底から愛情を捧げてゐた、しかし國弘が小藤との約束を實行

する念慮が無いといふのは、彼には身命懸けて戀ひ慕つてゐる、由緣といふ美人があつたからである。從兄妹同志といふ關係があるところから、熱誠をもつて訴へたなれば、屹度希望が達し得られると信じてゐた折柄へ、由緣の父なる嘉德から、結婚さすといふ辭を聞かされたから、天にも昇る嬉さを覺えて、實現の日を早かれと待つてゐるのである。爲に萬一由緣との結婚が成立した場合、小藤の妨害を恐れて暗に伊藤子爵が故障を唱へる如く吹聽するのである。

小藤は心配顏に、

「それでは、飽まで許して下さらない節は、貴方何うなさる御決心なの！」

「さあ、何うするといふ決心が就かないからそれで當惑してるのだ。」

「ですけれども、大臣方にだつて、軍人方にだつて、藝妓を奧樣にしてる方、隨分あるぢやありませんか、大臣するほどの方でありながら、餘程野暮な方ね。」

「外國へばかり赴任して、殊に英國へ永く駐在してゐたものだから、品性と人格の

高いのを誇にしてゐるから藝妓なぞ人間のやうに思つてゐないから堪らないさ。」

「へえゝ……隨分だわね……那樣方に相談なされば、到底希望は遂げられないから、默つて結婚して了へば宜いぢやありませんか、結婚は當人本位ですもの、一々親戚に相談する必要ないぢやありませんか。」

「ところが、他の親戚は左に右、あの叔父だけには何うしても相談致なきやならないことに成つてるのだ親父が死ぬ時遺言狀を作つて、あの叔父に財產の監督を一任して置いたから、無斷で結婚する日になると、どんな故障をいひ出されるか知れないからね。」

「私可厭だわ、今日に成つて那樣こと仰やつて……若し伊藤樣が結婚させないと仰やれば、私との約束破る精神なの！」

「莫迦だね、私に破る精神が在るのなら、伊藤の叔父が何といはうと破つて了うけれども、破る精神が無いからこそ、這麼に苦心してるぢやないか……唯困るのは

叔父に反抗して結婚致やうものなら、現職を休めさせられるかも知れないから、それを心配するのだ。」

「なぜです。」

「陸軍大臣と毎日のやうに會つてるから、何を告げるか知れないからね。」

「眞箇可厭な叔父さんね、那樣叔父さん無ければ宜いわ。」

「あの叔父さへゐなければ、お前との結婚は勿論、財産も自由に成つて、お前の落籍位何うでもなるのに、全く可厭な叔父だよ。」

「眞箇困りましたね。」

絶望

自棄酒を呷りながら、小藤を相手に一夜を明かした國弘は、翌朝未明に下宿へ歸つて、例の如く出勤時刻に出かけて往つた。しかし此日は由縁の意見を確めて、諾

否の決答のあるべき約束日である爲に、彼の心配は一方ならないものであつた。

「どう考へて見ても、叔母の辭といひ叔父の口振といひ、進んで結婚させやうといふ意志が無いんだから、今日の決答も無論絶望に終るかも知れない、獨り叔父叔母のみならず、肝心の由縁が、あの佐分に心を寄せてゐる樣子が見える上に、昨日帝劇へ女を連れて往つてるのを見附けられたから、一層惡感を起させたかも知れない左に右夕方までには挨拶があるだらうから、何事も其上の事だ。」

かくて彼は一日の軍務を終へて下宿へ歸つたが、軍服も脱がず下宿の一室で、深い思案に沈むのであつた。

「午後七時頃決答を聞きに往く筈に成つてるが、萬一拒絶された節は、どういふ態度を取れば宜いか知ら……すぐ〳〵歸るのは實に不面目極るからね。寧そ叔父を罵倒して、此方から絶縁して遣らうか知ら……しかし叔父を怒らすと、全く休職にする位な復讐は遣りかねないからね……何だか聞に往くのが嫌に成つた。電話

で聞いて遣らうか知ら……ところで愈よ拒絶された場合は、伊藤家へ對する復讐は復讐として、結婚はどう極めたものか知ら、容貌の美醜を度外にして、一身上の利益から打算すれば、無論聯隊長の令嬢を貰ふのが、何彼に就けて利益はあるけれども、容貌の點からいへば、由緣が滿點なら、小藤は八點、聯隊長のは五點位なものだからね、然うかといつて、小藤と結婚するには、種々の故障が在るばかりでなく、事に依ると聯隊で調査して許して下れないかも知れないからね……」

かゝる事を考へてをる折柄、下宿の主婦が入つて來て、

「國弘さん御書面が參りましてございます。」

と一通の郵書を渡した。

「それは憚り樣。」

と受取つた。

「御飯の支度が出來ましたが、直に差上げて宜しうございますか。」

いひつゝ國弘の姿を見て、

「まあ貴方まだ、軍服でゐらつしやいますんですか。」

「一寸出かけやうかと思つてゐましたが、もう舍しませう、直に御飯持つて來て下さい。」

「左樣ですか、それでは直に差上げます。」

と主婦は立去つて了つた、國弘は不安さうな顏色して、受取つた書面を開封するのであつた。書面は伊藤子爵から來たのであつた。

昨日の件に附、由緣の意見相問ねゐ處、宜しく謝絶し呉れよと申出でゐに附、左樣御承知被下度、委細は面會の際申盡すべくゐ

鹿造殿　嘉德

書中にはかく記してあつた。

「到頭拒絶しやがつたな、酒上とはいひながら、あの時は確に結婚さしても宜いといふ精神があつたに相違ないけれども、其後意見が變つて來たのだ、事に依と佐分から結婚でも申込んだのぢやないか知ら、どうも彼奴の擧動が怪しい、若し彼奴と結婚するやうな形勢があれば、容易く結婚させるものか屹度妨害を加へて遣る……

……」

と心に憤慨を洩らすのであつた。ところへ主婦が夕飯の膳部を運んで來た。而うして給仕しながら微笑を含んで、

「今晩も御出かけでゐらつしいやすか。」

と問ひかけた。

「是非來て下れといふ書面が來たから、一寸出かけるかも知れないです。」

主婦は益々笑顔を作つて、

「又お泊りでゐらつしやいますか。」

國弘も微笑を泛べて、

「今夜は遲くとも歸つて來ます、昨晩は餘り深更なつたから、止を得ず泊つて了つたです。」

辯解しつゝ食事を了つた。主婦は愛嬌を殘して食器を運び去つて、國弘は漸く立つて、軍服を和服と着換えたが、又机の前に坐つて卷莨を喫しながら考上始めた。

「由緣の方が到底絶望に了るとすれば、利害上へ竹内聯隊長の好意を容れて、豐子さんと結婚するのが、一身上非常の利益があると思ふが何うしたものか知ら……容貌の點からいへば、比較にはならないけれども、しかし十人並以下の嫖緻ぢやないから、我慢のならないことは無いがね。」

と又考へる。

「竹内聯隊長へも兩三日中に挨拶するといつてあるのだから、遲くも明日か明後日中には挨拶致なきやならないから、何かと決心致なければならないが、目下のとこ

ろ上長官として、日々顔を合せてをりながら、謝絶するのは、如何にも氣の毒なり苦痛である、寧そ犧牲的結婚をして、一身上の利益を計ることにするかね……

何うもそれが現代的らしく思はれる、陸軍大學へは中尉時代から志願して到頭失敗して了つたし、容易に佐官に昇進は爲し得られないから、結婚政畧でも取て、榮達を計るが策の得たものかも知ない……しかしだ愈よそれと決定する以上、第一に解決しなければならないのは小藤との關係だが、何う解決したものか知ら、當人は全然國弘夫人をもつて任じてゐるのだから、得心の行くやうに解決しなければ、何を爲出來すか知れたものぢやないからね、拙策を取らうものなら職務に關係するやうな、災禍を招かないとも限らない……」

又熟考するのであつた。が、やゝ寸時の後微に笑を含むで、

「然うだ、伊藤の叔父が絶對に拒んで、若し强ひて賤業婦などゝ結婚するならば、陸軍大臣へ上申するといふから、これまでの緣と諦めて呉れと、叔父を惡者に斷る

のだね、それならば止を得ないことにして、諦めるかも知れない、左に右これから住つて、結局の意見を確かめて見やう。」

かく決心するが否や、直に下宿を出て例の開芳亭へ赴つた。而うして小藤へ口を懸けさしたが、幸ひ家にゐた、程なく席に待した。

「虫が知らせたのか、入來しやるやうな氣がしたものですから、外からお座敷をいつて來なければ宜いと、心配してゐましたのよ、能く入來しつたわね。」

欣々といつた。

「是非お前と相談しなければならないことが出來たから、それで出かけて來たのだ。」

小藤は忽ち不安さうに、

「相談といつて、甚麼ことなの！　心配ことぢやなくつて！」

「實は先日來お前との結婚に就いて重なる親戚へ内々意見を問ねて遣つたのだ。と

ころが何れからも何の返答も無いから、どうしたものからと、内々心配してゐたところが、今日伊藤の叔父から親戚一統を代表して、返書を送つて來たのだ……」

「なんといつて來まして！」

「それが頗る不埒千萬な挨拶なんだ怒つて呉れては困るけれど、藝妓のやうな賤業婦と結婚するのは、親戚一同大不賛成であるから、若し強ひて結婚する場合には、親戚一同絶縁するばかりでなく、次第に依つては陸軍大臣へ上申するといふ挨拶なんだ、かう反對されて見ると、結婚は絶對に不可能に成つたから、それで相談に來たのだ。」

小藤は駭き顔に、

「まあ大變なこかになりましたね、どうしたら宜いでせう、何ととして承諾して頂く方法はないでせうか。」

「それがだ、普通の人なら、再三賴んで見るけれども、伊藤の叔父と來たら、何事

に依らず、一度かうと極めた上は、誰が何と賴んでもそれなら恁う致やうと、意志を翻すやうな、那樣生優しい人間ぢやないんだから、それで困るのだ、自分の惡いと信じたことは、絶對に反對して、設令それが道理であつても、意見を徹さなきや承知しないといふ、頑固者だからね、眞箇困つて了ふのだ。」

「それではどういふ方法を取れば、私共の願ひが叶ふのでせう。」

「私も何か手段はあるまいかと、頭腦の痛くなるほど考へて見たけれども、伊藤の叔父が現世にをる限りは、到底約束は實行出來ないと思ふのだ、強ひて結婚致やうものなら、陸軍の方を退かなきやならない羽目になるからね、陸軍へ奉職してをれはこそ、相當の俸給も取れるのだが、退職して了へば、迚も充分に生活することは出來ないからね、然うなると私は管はないけれども、お前に忽ち苦勞させなきやならないから、それが氣の毒束を解いて了ふのも殘念だが、さうなんだ。だから私は百計盡きて相談に來たのだから、お前の意見通りに任せるから、お前に好い考へが

あるなら、聞かして貰ひたいのだ。」

と、眞しやかに告げた。

「……」

小藤は無言の儘、やゝ俯向いて熱と考へるのであつた。小藤が國弘と夫婦約束したのは、其初め色や戀ではなかつたので、確に陸軍大尉といふ肩書が目的であつたのだ。それが馴染を重ねるに從つて、漸次愛情が出て來て、今日では、勤といふ輕薄な念を去つて、情人を以つて交際ふまで深い關係になつたから、今更約束とて陸軍を休めさしてまで、約束を履行する決心も就かないのである。願はくならば、現職の儘で約束を實行したいのが、唯一の希望であるのだ。

やゝ暫くして彼女は、如何にも思ひ餘つたやう、

「眞箇可厭な伊藤さんね、那樣意地惡は死んで了へば宜いわ憎らしい……人の戀路の邪魔する奴は、犬に咬まれて死ねば宜いと、歌の文句にさへあるぢやありませ

んか、人のことを賤業婦だなんて、人間でないやうに仰やつても、自分だつて其賤業婦に滿更御關係のない理でもないでせうに……」

「あの叔父ばかりは、叔母の外に女といふ者は知らないかも知れないよ、眞箇石部金吉だからね……こつくり死んで了つて呉れたら私にはまだ〳〵幸福なことがあるんだが憎まれ者世に憚るの譬へに洩ず、生れてから醫士に手を握つて貰つたことがないと、それを自慢するほどの健康體だからね、百歳位まで生きるだらうよ。」

「本當に憎まれ兒の頭堅しね、それではどうすれば宜いんです、私今更切れたり廢めたり嫌ですよ。」

甘垂聲を出す。

「だからさ、切れなくつても宜いが其代り陸軍を退く覺悟致なければならないが、さうなると、手鍋提げる決心して呉れなきや困るよ。」

「宜いわ、倶々苦勞するのなら管はないわ。」

「それにしても、落籍の金子に困るぢやないか。」

「ですから、今暫く御互に辛抱して借金を輕くしてから親元身受といふことにすれば宜いぢやありませんか。」

「ところが、那樣悠長なことが致てゐられない事情が起つたのだ。」

國弘と小藤とが頻りに相談してゐるのを、先刻から隣室の襖際に身を寄せて、熱心に耳を傾けてをる小若い男が在つたが、二人は更に知らぬ樣子で、尙も密談に耽るのであつた。

小藤は覺えず膝を進めて、

「悠長なことが致しゐられないと仰やつて、甚麼事情が起つたの！」

と心配さうに問ひかけた。

「其事情といふは、外のことぢやない結婚問題だ、私がお前の爲めに放蕩するのを非常に心配してゐた親戚共が、這度愈よお前を落籍して結婚するといひ出したもの

だから、早く相當な緣談を搜して、結婚させるが宜いと相談を決した結果、伊藤の叔父の主唱であらうと思はれるが、さる軍人の娘と、何でも彼でも結婚せよといひ出したのだ、けれども私はお前との約束があるから、斷然可厭だといつて刎附けたが、强ひて親戚一同の意見に反對するなら、軍人にあるまじき不品行を其筋へ摘發すると脅迫するのだ。考へて見れば、三十一になる今日まで、一方ならない苦勞をして、漸と大尉まで昇進したのに、不品行の廉をもつて、休職にでも成らうものなら、眞箇千日に刈り取つた茅を一時に燒くも同然で、これほど莫迦氣たことは無いからね、それも諾否の決答を直にせよと迫られたのだが、人間一生の大切なことだから、直にといふ理に行かないから、向ふ一週間の後何とか挨拶するといつて別れたのだ。だから一週間の後には否か應かの決答致なければならないから、それでお前に相談するのだ、お前が藝妓でなく、普通の娘ならこれほどの反抗は起らないであらうが、藝妓といふだけに、非常な反感を起されたのだ。」

「まあ、隨分な弱い者苛めね、それでは貴方と私とを、絶對に引放さうといふ御親戚の御量見だわね。」

「然うだ共、然うだとも、伊藤の叔父なぞは頭から那樣賤業婦を人間と思つてをるから、結婚が致たいなぞと、痴けたことを言出すのだと全で人間だと思つてゐないのだから堪らないさ。」

「まあ、酷い事仰やるわね、して見ると私との結婚に反對なさるのも外から貰はうと仰やるのも、親戚御一同の意見とはいふものゝ、其實伊藤樣が仰やるんですね。」

「然うだとも、伊藤の叔父が恁うするといへば、他に反對や異議を唱へる親戚は一人もないさ、伊藤の叔父を神樣のやうに心得てをる者ばかりだからね。」

この辭を聞いた小藤は、心の中に深くも伊藤を怨む色が見えたが、無言の儘やゝ寸時考へた後、

私も今日の今まで、こんな結果に成らうとは、夢にも思つてゐなかつたのですか

ら、直に挨拶致かねますから、どうか決心の就くまで四五日待つて頂戴な、能く考へた上で挨拶致ますわ。」

「私も絞れるだけ智惠を絞つて、どうか目的通りに致たいと思ふけれど、萬一名案が出ない節は、殘念でも泣いて別れなければならない結果に成るからね。」

「私、死んでも約束破るのは可厭ですよ。」

「まあ〳〵靜に考へて見るが宜い、私も今夜は他に往かなければならない約束があるから、これから直に歸つて往くから……」

「だつて、せめて十時頃まで遊んで往らつやいな、まだ話したいこともあるんですから。」

「八時半までに必ず往く筈の約束があるから、又明日の晩でも來ることにする。」

と國弘は、情なくも歸つて往つた。小藤は國弘の辭を眞に受けて、思に胸を取亂しながら、やがて歸りかけた。すると突然、

「小藤さん、些と待つて下さい。」
と呼留める人があつた。

悪魔

我名を呼ばれた小藤は、聞馴れない聲音であつたゝけ、駭き顔に振返つた。見れば唯た一度招かれた事のある、姓名さへ記憶せぬ客であつたから、再び意外に驚きながら、片方の笑窪を少しく見せて、
「おや今晩は……誰方か知らと思ひましてよ。」
と挨拶した。姓名こそ記憶してゐないけれど、姿は時々見かける男で誰いふとなく小松島屋と綽名された二十七八の、遊人とも附かず、學生とも附かぬ風體をした、小粹な男であつた。客の名は五狼姓は小栗である。
男も微笑して、

「もう歸るのかね。」
「は。」
「歸るのなら、暫時相手をして呉れないか、折角誰か招んで貰はうと思つてゐた折柄だ、是非話したい事もあるんだから……」
「然う、それは有難う、それでは家へ一寸然ういつて貰ひますわ。」
いひ棄てゝ小藤は女將の部屋へ往つた。而うして女將お勝に客の姓名など問ねた後、改めて呼留られた客の席へ入つた。
「隨分暫くでしたわね、時々私の家の前をお通りなさるのを御見受致しますが、旦那のお宅は、お近くでゐらしつて！」
「遠くはないさ愛住町だからね。」
「然うですか、ぢやッイ其先ですわね。」
「一丁ばかりよりないさ。」

「何時入來しやいまして！」
「此家へか。」
「は。」
「然うさね、もう小三十分にもなるか知ら……」
「何うして私の來てる事知つてゐらしつて！」
「誰か藝妓が來てゐるかと女中に問ねたら、お前が來てると聞いたから、それで知つた理さ。」
「然うですか、お連樣は？」
「何有連はないさ、ぶらりと一人で散歩に出かけたが、退屈紛れに飛込んだ理さ。」
「然うですか……いつまでもお寒いぢやありませんかね。」
「この空模樣ぢや雪かも知れないね。」
「私冷性ですから、這麼に寒いと一縮に成つて了ひますのよ。」

「それぢや熱いのを一杯飲んではどうだ、寒さ凌ぎには御酒に限るさ。」と杯を差した。
「どうも有難う、折角ですから御遠慮なく頂きますわ、寒さも寒し、今夜は少し心の懊惱する事がありますから……」
微笑みつゝ受けた。
「氣が懊惱するつて、それは又どうした仔細だ、心配事でもあるのかい。」
「旦那お察しが宜い事ね、序にお手の筋を願ひませうか。」
「掌の筋を見なくとも、お前の顏を見れば、何が爲に心配事が在る位は立所に分るさ、私は觀相術を研究してゐるからね。」
「觀相術といふのは、人相を觀る事なんですか。」
「然う〳〵其時の相貌に依つて、禍福吉凶は勿論、心理狀態まで明かに判斷するのだ。」

「では旦那、それが家業なんですか。」
「笑談いつちや不可い、これは隠藝だよ。」
「では、私の心配事當てゝ御覽なさいな。」
「いひ當てるのは雜作もないが、當つたらどうするか。」
「何か奢りますわ。」
「宜しい、それでは屹度いひ當てゝ見せるから、熟と此方を向いてゐな。」
小藤は眞面目に小栗の方へ向いた。小栗は熟と瞶めてをつたが、
「解つた、明瞭に解つた、お前は情夫の爲に非常な心配事があるだらう、どうだ。」
と返辭を促すやうにいつた。
小栗の辭を聞いた小藤は、觀相の適中に舌を卷いて、最初の輕蔑心は早くも消えて信用せずにはゐられなかつた。
「眞個貴方御上手だわ、惚ける理ぢやないんですけれど私眞個さる人のことで、非常に心配してゐることがあるんですけれど、それが何うして宜いか、思案に餘つてるのですが、纏るものか、破れるものか、後生だから能く觀て頂戴な。」

小栗は得意さうに、故と沈着拂つて、
「宜しい、吉凶を觀破して遣らう。」
と再び穴の明くほど顏を眺めた末、
「月は依然として圓く光り輝いてをる、雲が蔽ふて暗くしてをる形象がある。二人の中に變りは無いが二人の中を絶對に破らうとする、邪魔者があるから、これを拂つて了はなければ、遂には二人の關係も、それが爲に破れて了ふ象であるが、心に當ることがあるかね。」
眞面目に告げた。小藤は愈よ驚いて、
「まあ能く當りましてよ、眞個二人の中に心變りはないのですけれど、外から邪魔が入つて、仲を割かうとしてるんですよ、何とかして其邪魔者を逐拂ふことはなら

ないものでせうかね。」

「それは何でもないことだが、しかし事情を聞かないことには、相談相手になられないぢやないか。」

微笑みつゝ言つた。

「それは然うですわね……」

と、熟と考へ込んで了つた。其態度を見て取つた小栗は、四邊を憚る忍び聲で、

「實は私は、弱い者を救けて、強い者を挫ぐと言ふ、義俠的團體を作つて、卒と言ふ場合には命知らずの乾兒が、三百人は立所に集る、所謂決死團の團長に成つてるから、事と場合によつてはどんな邪魔者でも、秘密に攘つて遣らないものぢやないが、いづれ色戀の邪魔する奴は、色敵かそれでなかつたら、親兄弟か親戚の奴等だらうね。」

小栗の頼母しい辭に動かされた小藤は、思案に盡きてゐる際とて、前後の思慮もなく、

「二人の仲を割きかけてるのは、先方の叔父に當る人なんですが、それが普通の人なら、何とか仕やうもあるんですけれど、華族の上に大臣を勤めてゐらつしやるんですから、手の附やうが無いんです。」

「何有ッ華族で大臣を勤めてる人が邪魔をするつて、其奴は面白いね何うだ引受けて其邪魔を拂つて遣るが、詳しい話を聞かさないか。」

「屹度引受けて下すつて？」

「世間へは秘密だが、私は曙義團の團長だ。引受けると言つたからには、屹度引受けて遣るよ。」

曙義團と聞いた小藤は、驚きの眼を睜つて、

「それでは、いつぞや消防夫と大喧嘩をして、殺したり殺されたりした、あの曙組なんですか。」

「然うだ、然うだあの曙組だ。あの時殺されたのは皆な私の乾兒のものだ。」

小藤は曙組と聞いて、忽ち不安を起して、口を噤んで考へ込んだ。それと察した小栗は、

「曙組と聞いて怖氣附いたね、はゝゝ、心配しなくとも大丈夫だ、一端斯うと引受けた限りは曙組の仕事として實行するので、一命を奪られたからつて、頼んだ人の名前を出したり、迷惑に成ることはしないよ。」

「……」

小藤は決しかねて、無言の儘まだ考へてゐた。

「考へなくとも宜いぢやないか、厭だと言ふことを、強ひて頼まれやうといひはしないよ。」

と飲半の酒を呷と飲み乾した。

「あら、決して厭ぢやないんですけれど、こんな御迷惑を願つては相濟まないと思

つたからです、それでは眞個引受て下すつて！」

「小栗は男子だよ、引受けて遣るといつたからには、屹度引受けて遣るが、しかしだ、私が手を下す理ではないから、働く奴に何程かの報酬を遣つて下れなくちや困るんだ、場合に依つては、其邪魔者を殺つ附けて了ふかも知れないからね。」

小藤は又顔色を變へて、

「那樣亂暴されては、私の身が險呑ですから、もう思ひ切りますわ。」

「鉛の熱湯を飲まされても、お前に頼まれたと、白狀するやうな人間は一人もゐないから、要らない心配するには及ばないよ。」

「では、どうか成丈手柔かく話をつけて頂戴ね、私心配ですから……」

「お前に迷惑はかけないから、少しも心配に及ばないさ。」

「してお禮は何程ばかり差上げたら宜いんでせう。」

「さうさね、お前の方から頼んで來たのなら、少くも三百圓は貰はなきやならない

が、私の方から勸めて引受けたのだから、大負けに負けて百圓だけ遣つて貰ひたいが、都合はどうだね。」

「……」

「百圓で思ふ男と樂まれるなら、安いものぢやないか。」

小藤は寸時考へてをつたが、決心したやう、

「如何にも百圓差上げますが、しかし手元にはないんですから、どうか三四日待つて下さいな、何とか都合して差上げますわ。」

「金子は急がないから、愈よ實行にかゝる時で宜しいが、それでは一應事の成行を聞かうぢやないか。」

「は、お話致ますわ。」

と四邊に氣を配つて、事の顚末を詳しく告げた。

「諾矣々々、大方那樣ことだと思つたよ、何有華族であらうと、大臣であらうと、

吾々の眼中人爵無しだ、殊に伊藤外務大臣とは、條約改正に就いて、絶對に意見を異にしてをるから、いはゞ我國の政敵だ、必ずお前の希望が叶ふやうに邪魔者を除いて遣るから安心するが宜い。しかしだ、私に賴んだことは絶對秘密にして、親兄弟にでも未來の夫にでも、口外することは出來ないよ、私等の方でも、お前から賴まれたことは、命を取られても口外致ないからね、このことだけは堅く守つて貰ひたい、萬一口外したことが知れたら氣の毒ながらお前の一命は必ず貰ひ受けるよ。」

と宣告するやうにいつた。小藤は何となく恐怖と、不安とを起さずにゐられなかつたが、今更止を得ないことゝ斷念した。小栗は平氣なもので、

「とんだことで理に陷て、折角の酒が覺めて了つた。さあ前途の成功を祝つて、陽氣に飲まうぢやないか。」

「相濟みませんでしたね、さあお酌致ますわ。」

と、今までの話は忘れたやう、愉快に談じ且つ飲むのであつた。而うして一時間ば

かりの後、小栗は後日の會見を約して歸つて往つた。小藤も直に後から歸つて往つたが、まだ不安と恐怖とは消えなかつた。

「どうして伊藤さんを說く量見か知らないが、首尾克行くか知ら……しかし國弘さんに、恁々いふ理で某人に賴んだから、結果の知れるまで、何でも彼でも待つて頂くことに致やう。」

月は在りながら、骨を刺すやうな冷い風が、颯々と吹き荒むでゐた。小藤は顏を背向けつゝ、

「しかし百圓といふ金子は、どうして調達へたら宜いか知ら……寧そ主婦さんへ賴むで借りることに致やう。」

かう決心して我家へ歸つた。時はもう十一時過で、月は又曇つた。

開芳亭を出た小栗五狼は、醉步蹣跚として折柄の寒氣も身に泌みぬ風情で、焦茶色のトンビに大黑形の帽子を眉深に被り、熟柿臭い酒氣を吐きながら、

「飲むべし漁るべしだね、小藤が來てをると聞いたから、どんな客に招ばれたのかと、密と覗いたのが勿怪の幸ひ、聽耳立てた奴等の相談、此奴は物に成りさうと、俄仕立の觀相術で、甘々一杯箝めて遣つたが、どうか百圓に在り附たいものだな……」

と心に欣びつゝ、やがては愉快に堪へぬやう、

「高樓傾け盡す三杯酒……天下興亡眼中に在り……」

と微吟しつゝ、步むのであつた。折しも橫町から出て來た一壯漢が、絣盞めの扮裝で、

「愉快さうぢやありませんか。」

と辭をかけた。小栗は立留つて、

「やア大東か、何處へ往つたのだ。」

「相變らず活動を續けて見ましたが、如何なる手段をもつて迫つても、頑として改

める樣子が無いから、愈よ實行の外手段が盡きて了ひました。」

「然うか、實は我輩も二三の有力者と會見して、當局の方針に就いて内々探つて見たが、外相は勿論、閣員一同が非常な決心をもつて、改正案の遂行に努めてをるさうだから、いくら在野黨や、民間の有志者が、言論文章位で、攻擊したところが馬の耳に風が當るほどにも感じないといふことだから、折角君に知らせやうと思つてをるのだ。」

と、四邊を憚りながらいつた。

「あの伊藤といふ奴は、國を害する賊臣です亂臣です、あゝいふ弱虫に、條約改正の大任に當らすのが間違つてゐます。」

慷慨の餘り覺ず高調子に罵倒する。酩酊しながらも小栗は有繋四方を氣遣ふて、

「聲が高い、靜に〳〵……」

壯漢は大東進吾といつて、自由黨系に屬する壯士であるが、代議士選擧の際、反

對黨の代議士の候補者を途上に要擊して負傷せしめた爲に、二ケ年の刑罰に附せられ、出獄後遂に曙義團へ加つて、惡德を働きながら、一面狂的に政治を論議してゐるのである、年齡は二十八で、筋骨の逞しい、比較的風采の揚つた男で、鼻下に髭を蓄へて、常に絣の綿入に同じ羽織を着て、握太のステッキを携へてをる。

「國家の爲には換へられないから、中止致なければ、最後の手段を採るんだね。」

と決心を促がすやうに小栗がいつた。大東は意氣軒昂として、

「我輩の心中既に決する所があるから、此件に就いては、他の團員の加勢は要らない、我輩一人で澤山です。」

「折角の大事が洩れてはならないから、もう途上の話は舍して、明日我輩の宅で、篤と相談致やうぢやないか。」

「最後の手段を採るに就いては、種々相談することもありますから、それでは明日篤と相談することに致ませう。」

「これから倶樂部へ歸るのか。」

「實は貴方に會つて、少々拜借して新宿へでも出かけたいと思つてゐましたが、御都合は如何でせう。」

「少し位ならあるから持つて行くが宜い。」

いひつゝ袂を探つて紙幣二枚を與へた。

「それでは、明日午前中にお宅を訪ねますから御在宅願ひます。」

「成たけ早く賴むよ、他へ往かなければならない用向を控へてをるから……」

「承知致ました。」

大東は別を告げて立去つた。

「奴を煽動して伊藤を殪さすと、小藤の賴みは自然に果されるといふものだ、持つべき者は乾兒だね。」

會心の笑を泛べた。

新給仕

さても其後優少年は、同情ある人々の厚意の下に、泣く〳〵養母お政の亡骸を埋葬し了つた後、近所の人の周旋に依つて、住馴れた長家を去つて、櫻田本郷町の裏通で、倉田重吉といふ、老夫婦のみの隱宅へ同居する身となつた。この重吉といふは某洋服裁縫師の老父であるが、伴に妻を迎へると共に、營業をも讓つて了つて、お町といふ老婆と共に、此處へ隱居したのである、重吉は六十八、お町は六十四で兩人共熱心な天理敎信者で、毎日のやうに近くに在る敎會へ出かけて、敎祖に祈念するを唯一の樂しみとしてをる。

階下が六疊と四疊半と二疊の三室で、六疊一室の二階が在るのを、優少年に義俠的貸與へたのである。

優が義俠的にしろ、僅か十三歳の少年でありながら、一室を借入れるに至つたの

は、説明するまでもなく佐分誠也の盡力に依つて、外務大臣附の給仕として勤務する事になつたからである。佐分の斡旋に依つて洋服も出來た、靴も買つた、而うして初めて外務省の鐵門を入つて、陸奥伯爵の銅像を仰ぎ見た時は、自然に威壓されるやうに感じて、今まで左程尊い場所とも感じなかつた外務省が、俄かに神の社前にでも詣でた時のやう、崇高の念に打たれて、胸に時ならない鼓動が起つた。同時に自働車や俥で入つて來る、フロック姿の紳士が、皆な高位高官の人々のやうに思はれて、益々胸が騒立つのであつた。漸くにして入口まで進んで怖々ながら中の樣子を眺めて、

「何處から入つて、誰に取次を頼んだものか知ら……」

と不安さうに佇んでをると、其容子を怪しいと見て取つた受附が、

「おい〳〵お前は何處から來たのだ、用向があるなら此處へ來るのだ。」

誰何されて、ハッと驚いた。同時に又、奥からフロック扮裝の紳士が顯れて、

「おい高木々々〳〵、此方へ來るんだ此方へ……」

と聲を掛けられたので、再び吃驚して其人を見れば、それは唯一の同情者たる佐分書記官であつたから、地獄で佛陀に會つた以上に歡んで、覺えずつか〳〵と寄り進んだ。

「初めてゞ樣子が知れないものですから、まご〳〵してゐました。」

と挨拶したが。堪へ得られないほどの寒氣に額に汗を泛べてをるのが認められた。

「私が連れて往つて遣るから、一緒に來るが宜い。」

「有難うございます。」

と、佐分に連れられて、廣い廊下を幾つも曲つて、二階へ昇つた。そうして又同じやうな廊下を曲り曲つて、大臣室と札を掲げた室へ入つた。室の中央には容貌の威嚴めしい伊藤外相が、フロック姿で、椅子に腰を掛けて、書類を調べてゐる時であつた。

「閣下、豫て御願ひして置きました給仕が、今日から出勤致しましたから、御挨拶に連れて參りました、どうか宜しく御願ひ致します。」

と佐分が紹介した。伊藤は眼鏡越に眺めて、

「然うか、これが例の新聞を賣つてゐた少年だね。」

「はい、左樣でございます。」

「名は何とかいつたね。」

「高木優と申します。」

答へて更に優に向ひ、

「大臣閣下だ、挨拶するが宜い。」

優は、冷汗を流しつゝ、

「私が優でございます、どうか宜しく御願ひ申します。」

と恭しく一禮した。

「お前は大臣附の給仕として使ふ筈だから、佐分君に何彼の事を能く聞くが宜い。」

「はい。」

「佐分君、政務と通商と、そうして電報主任の所など、能く敎へて遣つて下さい。」

伊藤大臣の命を受けた佐分書記官は、親切にも自ら各局各課を隈なく連れ歩いて主任の人々へ紹介して遣つたばかりでなく、他の給仕や小使にも紹介して、何彼の事を賴んで遣つた。

かくして優は、此日を始めに大臣附の給仕として、新なる生涯に入つた。三四日間は、省内の勝手も分らず、知己友人も無いために、小心翼々、鞠躬如として、只管失錯のないやうにと勤めてゐたが、一週間を經た頃は、省内の樣子も知れる、同じ給仕仲間に友人も出來る、殊に省内切つての敏腕家を以つて聞えてをる佐分誠也といふ同情者は在る、大臣附ではある、自分の職務として命ぜられた事は、粗漏なく機敏に處理する事が出來るやうに成つたので、いつしか官衙にも馴れる、省内の

人々にも馴染みが出來て、始め恐怖心が漸次に消えると共に、職務の間隙には、佐分の勸に依つて、中學程度の講義錄を繙くのであつた。

丁度十日目の朝であつた。俸給十圓といふ辭令書を下附されたが、其を見た時の彼が心中は、譬ふるに物の無いまで滿足した。而してこの十圓をもつて、生活すべく豫算を立てゝ、何程かの貯金を致やうと考へた。かゝる少年が、かゝる精神を起すに至つたのは、畢竟便るべき親戚故舊が無いために、自然と獨立心が養はれた結果である。

一日彼は官衙から歸つた後、亡き養母の寫眞を取出して、活ける人に物いふ如く自分が今日外務省に勤めてをる事を、報告するがやうに獨語してゐたが、やがて俄に思ひ泛べたやう、

「僕は高木の家に生れた、眞實の小兒だとばかり思つてゐたのに、阿母さんの辭によると、岩田とかいふ產婆の世話で、生れたばかりの時に貰はれて來たんださうだが、して見ると、本當の兩親が無くちやならない理だが、何する人の小兒に生れたのか知ら……自分の小兒を育てる事が出來なくて、他人へ遣るほどの親だから、どうせ其日の生活に困るやうな、貧乏人には相違無いけれど、生てゐるなら餘所ながらにも顏が見たいな、何しろ十三年以前の事だから、或は死んで了つたかも知れないが、兩親共死んで了はないで、片親でも生て居て、それが都合好く、人間並の生活でもしてゐて下れると、どんなに嬉しいか知れないがね……何しろ岩田といふ人の居所も分らなければ、兩親の住居は固より姓名すら分らないんだから、探すにしても手續が無いからね……」

と熟と考へてをつたが、忽ち起つて、煤ぼけた幅物の箱を取出した。

「阿母さんの遺言によると、この掛物と短刀とが、僕を貰う時に附けて在つた品ださうだが、神田の火事に短刀は燒いて了つて、この掛物だけが遺つてゐるから、若や生の兩親に廻り會つた節は、此品を證據に名告合へといはれたが、いくら紀念の

品があつても、探す便りが無いんだからね……」
と呟きつゝ、幸ひの空床へ幅物を取出して掛けた。桐箱こそ煤けてゐるが、幅物はお政の丹精に蟲にも食まれず、金爛の裝幀燦として美を示して居る。優は瞬きもせず凝乎と眺めて居つたが、
「可いか否いか、繪の良否は知れないが、立派な布片で表裝がしてある所を見ると滿更價値の無い品ではあるまいが、這麽品を紀念に添へて在るところを見ると、其日活計の身分とは思へないやうにもあるけれど、何ういふ身分の者だつたか知ら……
……一度此掛物を誰かに見て貰ひたいものだな、價値の在る品なら、親の身分も大抵想像が就くからね。」
と尙も眼を放さず眺めるのであつた。
優は軸物を瞶めてをる中に、畵中の羅浮仙に魂を奪はれたやう、恍惚として身動きも致なかつたが、やがて感に堪へたやう、

「何の圖か知らないけれども、實に美事に描いてあるな、見れば見るほど生物を見るやうな心がする、雪舟と書いて在るが、かういふ名の畵家があるか知ら……這度佐分さんにお問ねして見やう、彼方なら屹度知つてゐらつしやるに相違ない、大臣でさへ種々な相談なさるほどだからね。」
と決心したやうにいつて、尙も瞶めてをつたが、果は紙と硯を取出して軸物の圖を頻りに寫し始めた。而うしてやゝ一時間ばかりの後、殆んど寫し了つたが、其繪は實に巧なもので、實物に及ぶべくはないけれども其運筆には、確に適法を認むべき點があつた。
折柄へ佐分誠也が、例になく和服姿で訪れた。優は驚きながら二階へ請じた。
「相變らず勉强してるのか。」
と言ひつゝ佐分は坐に着いた。
「はい。」

とは答へたが、今寫したばかりの繪が、傍に見えてをるので、何となくもぢ〳〵してゐた。

「丁度この邊を通りかけたものだから、お前に些と注意して置きたいことがあつてそれで寄つたのだ。外のことではないがね、お前は私のことを、旦那さん旦那さんと呼んでるが、この後は姓を呼ばなければならないよ、これまで甚麼關係があらうとも、私の關係と官衙とは全然別々だから、官衙では總て姓を呼ぶことに成つてるからね。」

「はい、畏りました。」

「それから、先日も些といひ聞かして置たが、お前の月俸は大臣の御厚意に依つて破格に給與される事になつたのだから、冗なことに費消してはならないよ、月々に要する費用を、何が何程、何が何程と極て置て、何程少しでも殘りの金子があつたら、必ず直に郵便貯金へでも預けて置くが宜い、貯蓄心の奬勵にも成るし、第一何

時病氣などして必要が起らないとも限らないからね、これまで新拜命の給仕は、殆んど七圓五拾錢位より給與されない例に成つてゐるんだから、それから比較すると二圓五十錢多いのだから、決して粗畧に使つてはならないよ。」

「はい、殘つたゞけは、必ず貯金致ます。」

「それから勉强のことだがね、夜學に往くといつても、今日のお前には月謝を出すことも出來かねるから、私が買つて遣つた、中學の講義錄を、隙さへあれば一生懸命に勉强するが宜い、くだらない學校へ通ふよりか、あの講義錄の方が、解り易くもあり、却つて力が附くからね、講義錄の代價だけは私が拂込んで置て遣るから……」

「有難うございます、學校へ入つた心に成つて必らず勉强致ますから、どうか宜しく願ひます。」

かゝる談話の中に、佐分は目敏くも傍へに擴げてあつた、先の繪を見出して、

「あそこに在る繪はお前が書いたのか。」
と問ひ試みた。優は極り惡しげに、
「はい、この軸物を見て、僕が惡戯書して見たんです。」
佐分は其繪を引寄せて、軸物の繪と見競べてをつたが、
「お前の繪としては、なか〳〵好く出來た、見て書いたのか。」
「はい。」
「見て描いて此位描けるなら、お前畫家に成つてはどうだ、事に依ると成功するかも知れないよ、繪を描く事好なんか。」
「僕、學校に往く頃から、繪が一等好です。」
「それにしても、中學程度の敎育を修養しなければ、到底徒事だからね。」
「いくら好でも、畫家には成れませんから、出來るだけの勉强を、一生懸命に致します。」

優が健氣にも答へた。
「然うだ、然うだ、何をするにしても、普通の敎育だけは受けてゐないと、日々に差支へるからね、中學程度の修養を了るまでは、他の事は行らないが宜い。」
「はい、然う致します。」
「それは然うと、この幅物は先日お前の宅で見たやうに思ふが、一體何うして恁いふ品がお前の家に在るんだ。」
「不審さうに問ひかけた。
「僕も知らなかつたのですけれど、先日阿母さんのいふには、僕を貰ふ時に、この掛物と金爛の袋に入れた短刀とが附てゐたのださうですけれど、短刀は神田で火事に遭つた時燒けまして、この掛物だけが殘つたんださうです。」
佐分は不思議さうに、
「それではお前は、高木お政の實の小兒ではないのか。」

と問ねた。

優は忽ち俯目に成つて、

「僕生れると間もなく貰はれて來たんださうです。」

「然うか、私は實子だとばかり思つてゐたが、貰はれて來たのかして……實の親といふのは、何處にゐるのだ。」

「……それが知れないんです、何でも岩田とかいふ產婆の世話で貰つたと聞きましたが、親の名も住處も、少しも知れません。」

「その岩田とかいふ產婆に問けば分るであらうが、岩田の宅は何方だ。」

「それも僕は知らないんです。」

「そいつは困つたね、何とかして搜す手段は無いか知ら……」

「僕も知れるものなら搜したいと思つて、先刻も獨り考へてゐたんですが、手懸りといふ物は、この掛物より無いんですからね、この掛物は雪舟と書いてありますが

良い品でせうか惡い品でせうか、見て下さいませんか。」

「これは雪舟と讀むのぢやない、雪舟と讀むので、僧の雪舟といふ名高い人が書いたのだが、繪の能く描けてをる點から考へると、眞蹟であらうと思ふけれど、雪舟の畫には、非常に僞物が多いから、實際のことを確めるには、上野の博物館へ持參して、鑑定して貰うよりは外はない。」

「眞蹟なら、どの位な價値の在るものでせうか。」

「然うだね、確としたことはいひかねるけれど五百圓以上の價値はあるだらうね。」

「へえつ五百圓……那樣價値のあるもんですか。」

「雪舟といふ人は、日本の畫家では屈指の人で、古人としては、一二に計へられる名人だから、好んで買へば千圓の價があるかも知れないさ。」

「大層豪い方ですね、しかしこれは眞蹟ぢやないと思ひます、自分の小兒を育てることが出來なくて、他に遣らなければならないやうな、貧乏な親が、こんな價値の

ある掛物など持つてる道理がありませんからね。」

否定するやうにいつた。

「しかし、それは一概に然うとばかりはいはれないさ、育てることが出來ないほど貧困に暮してゐて、止を得ず遣る人もあるが、中には又立派に暮してゐながら、妾腹に出來たり、藝妓なぞに出來て、自分の小兒として養育することが出來ないために、遣つて了ふ人もあるからね。」

「それでは、一度博物館へ持つて行つて鑑て頂きませうかね。」

「それでは、私の親くしてをる畫家に山寺天聲といふ人があるが、此人は當時一二といはれる畫家だから、其人に見て貰つて遣らう。」

「どうか御願ひ致します。」

と優が賴んだ。

「それではね、私が書面を認めて遣るから、これを持つて、山寺の家へ往くが宜い

電車に乘つて往けば、直に往つて來られるからね。」

と佐分がいつた。

「山寺さんの家は何方でせう。」

「小石川の關口町だから、江戸川行の電車に乘つて、終點で降りると直に知れるよ。」

「若し山寺さんに見て頂いて、僞物でないと極りましたら、僕も親も其日生活の勞働者やなんかでは無いやうに思ひますが、この掛物を手繰りに、搜す事は出來ないものでせうかね。」

「それは難かしいだらうよ、何故かといへば、育てる事のならない事情があつたればこそ、可愛い小兒を、知らない人に遣つたのだから今更搜したからといつて、その掛物を持つてゐるからには、私の小兒だといつて、名告つて來る筈はないからね先方から會ひたくて搜してをるのなら左に右、此方から搜すのは、到底徒事な手數

だと思ふのだ。それよりも、親の素性や居所が知りたければ、岩田とかいふ産婆を捜して、内々聞いて見るのが、何より捷徑いと思ふがね。」

「どうして捜したら宜いでせうか。」

「何處でも宜いから産婆の家へ往つて、岩田といふ姓の産婆はないかと問ねて見て分れば宜し、分らない時は、産婆組合の事務所を聞いて、事務所へ往つて聞けば、屹度知れるであらうと思ふが、しかしだ、岩田は知れるとしても、萬一先方から知らして下れてはならないと、口留されてをれば、假令知つてゐても、話して下れなかないかと思ふのだ、能く親知らずといふ約束で、遣たつり貰つたりする人が在るからね。」

「それも然うですね。」

「だから、お前の今日の境遇からいへば、實の兩親に會ひたいのは決して無理はないけれども、親は既に世を去つてゐないものだと思へば、諦めは付くのだから、自

分には親も無ければ兄弟もなし、全く一人切だと思つて、他を便りにせず、何でも彼でも、世に立たなければならないといふ、獨立心を起すが宜い、一人で遣つて行くといふ堅い決心さへ持つてをれば、決して困る事はないからね。」

「……」

優は答へもせず、熟と考へてゐた。

「私のいつた事解らないか。」

「いゝえ、能く解りました、僕もう決して他を便には致ません、一人で生れたと思つて、どこまでも一人で遣つて行きます、貴方の仰やる通り、棄てるやうな親を尋ねたところが、何の益にも立ませんからね。」

「其決心を變へてはならないよ、人間は決心一つで何でも遂げられるからね。」

「はい、決して變へません。」

「それでは、私はまだ訪ねる先方があるから、歸るがね、山寺君への書面は、今夜

でも認めて、明日官衙へ持つて往く事に致やう、兩親を尋ねる尋ねないは別問題としてこれはお前の所有品だから、眞僞を鑑定して貰つて、愈よ雪舟の眞蹟と極つたら、一財産在る理だからね。」

「どうか御願ひ致します。」

「それでは、熱心に勉强するが宜いよ。」

「どうも失禮致ました。」

佐分は別れて歸つて往つて。

「佐分さんは、實に親切な人だね、僕大人に成つて、世の中に出たら屹度御恩返し致なきやならない、未來の外務大臣だといふ評判だが眞箇豪い人だね。」

と感謝の意を洩らすのであつた。

剛膽

某日の午後一時過であつた。伊藤外務大臣は、條約改正が多忙な爲に食事後の休憩もせず、大臣官房の椅子に倚つて、頻りに書類を閲覧してをつた。すると給仕の高木優が、一葉の名刺を持つて入つて來た。

「此お方がお目に懸りたいと申されますが、如何申上げませう。」

と指揮を乞ふた。外相は名刺を受取つて眺めてゐたが、名刺には大藏省參事官菊池琴也と記して在るので何か條約改正に伴ふ關税問題に關して下も、打合せに來たのであらうと想像したから、

「第一應接室へ御案内して置け。」

「畏りました。」

優は立去つて訪問者を應接室へ案内した。そうして再び大臣室へ來て、案内した旨を告げて去つた、同時に伊藤外相は、フロック姿の軀を悠々と應接室へ運んだ、菊池參事官はと見れば、同じフロック扮裝の軀を、入口を背にして椅子に倚つてゐ

た。外相は相對した椅子に倚るべく歩を進めた。此刹那であつた。菊池參事官と名告つた男は、隱し持つたる兇器を閃めかして、

「國賊、天に代つて誅戮する覺悟しろ。」

と外相目蒐けて斬つてかゝつた。この意外なる狂暴に襲はれた外相はそれと見るより早くも身を飜して、有合ふ椅子を手にして、刺客の襲擊を遮ると共に、

「曲者だ誰か來て呉れ……」

と聲を限りに叫び立てた。刺客は猛り狂ふて、遮る椅子を力任せに押除けて、外相の胸部を狙つて、氷の如き刄を、骨も徹れと斬り附けた。其時であつた。優は主客に進める紅茶を運んで來たが、外相の危急を見るが否や、敏捷にも熱茶を入れた珈琲茶碗を取るより早く、刺客の面部へ投附けた。不意を擊たれた刺客は、これが爲に手元が外ふて、一時挫んだが、忽ち又猛然と迫ひ迫つた。優は再び茶碗を礫と拋附けて、大膽にも刺客の傍に馳せ寄るが否や、無手とばかり刺客の脚に抱き附いて

「閣下、早くお逃げなさい、早く〳〵々々ッ……」

と絶叫した。外相は逃れるべき隙間がなかつた爲に、殆んど危機一髪に迫つて、進退窮つてゐた際とて、この應援に力を得て、飛鳥の如く室外へ駈け出した。そうして再び、

「賊だ〳〵、早く來て呉れッ……」

と叫んで、ばた〳〵と階下へ降りた。この叫聲を聞いて、何れの室からも、いひ合したやうに駈け出して大臣室の前へ集つた。

刺客はと見れば、優のために妨げられた、目指す外相を取逃したので、血眼になつて後を逐ひかけたが、優が死力を罩めて脚に抱附いてをるために、軀の自由を失ふて進むことが出來ないから、全力を脚先に罩めて振放さうとしたが、轉びながらも緊乎と組附いて放さない、外相はと見れば、隙に乘じて既に入口を駈け出る時であつたから、

「えゝッこの餓鬼奴が！」

いふより早く、優の肩先を斬り附けた。優は斬られながらも、傷手に屈せず大臣の様子を眺めたが、既に室内に姿が見えなかつたので、漸く脚を放した、刺客は阿修羅王の荒れ狂ふ如き勢ひをもつて兇器を閃かしつゝ、外相の後を逐ふて室外へ駈け出したが、其時は四五十名の官吏が、大臣室へ集つて、がや〳〵と打騒いでゐる時で、外相は影も姿も見えなかつた。

「えゝッ取逃したか……」

と殘念さうに叫びつゝ、階下へ飛び降りやうとした。ところへ優が鮮血に染まりながら駈け出して來て、

「彼奴は大臣を殺しに來たんです、早く取押へて下さい。」

と叫んだ、その辭を聞くが否や、四五人の人が、刺客の後をばたゝと逐ひかけた。階下へ駈け降りた伊藤外相は、小使室へ來て、正門、通用門の閉鎖を命ずると共に、最寄の巡査派出所へ急を訴へさせた。刺客と聞いた血氣の人々は、早くも棍棒ステッキ等を手に手に持つて、階段の降口を取卷いてゐた。刺客はもうこれまでと諦めたか、逃れるだけは逃れやうと血路を開くべく兇器を振翳しつゝ、狂氣の如く降りて來た、待受けてゐた人々は、それと見るより、棍棒を振上げて刺客の向脛を力限りに毆り附けたゝめに、刺客は階段の上から眞逆樣に打倒れた、同時にばたばたと寄つて集つて、難なく取押へて了つた。が、刺客は喪心した人の如く寸時は茫然として口も利くことが出來なかつた。

此時まで一室に姿を隱してゐた伊藤外相は、漸く姿を顯して、

「取押へたら、緊りと縛り上げて了へ。」

と命令した。ところへ階上から數十名の人々が降りて來たが、其中の一人が、

「給仕が斬られたから、早く醫士を呼んで來て呉れ……」

と叫んだ。この聲を聞いた伊藤外相は、

「何有給仕が斬られた！」
と階段を見上げた。
「はい、閣下附の給仕が斬られました。」
「重傷か輕傷か。」
「確とは分りませんが、餘程重傷らしく見受けました。」
「然うか。」
と不安の色が見えたが、直に傍にゐた小使に向つて、
「早く往つて醫士を呼んで來い。」
と急き立てるやうに命じた。小使は命に依つて駈け出した。ところへ急訴に依つて警官が、喘ぎつゝ馳せ附けた。
「暴漢はどう致しました。」
「漸く取押へて縛してあります。」

と一人の官吏が答へた。
「然うですか、それはお手柄でしたして誰方も御負傷はなかつたですか。」
「給仕が負傷したさうですが、まだ詳しいことは分りかねます。」
「然うですか、左に右容易ならない重大事件ですから、本署へ報告して、判事檢事の臨檢を請求することに致しませう、どうか電話を貸して下さい。」
「もう、麹町警察へは電話で通知したから、程なく出張されるでせう。」
「然うですか、御知らせ下すつたのですか、それは安心致しました。」
かゝる問答の中に、伊藤外相は急いで二階へ上つて、負傷したといふ給仕を訪れた。見れば負傷した給仕は、己の危急を救ふ爲に、剛膽にも一命を賭して、刺客を支へた高木優であつて、負傷の箇所を布片で卷いたまゝ、苦しさうに廊下に横はつて佐分書記官の看護を受けてゐた。
「高木到頭斬られたさうだな、今直に醫士が來るから、苦しくても辛抱するんだよ

實にお前は見上げた者だ、お前があの際刺客を支へて呉れなかつたら、私は刺客の爲に殺られて了つたかも知れない、お前のあの時の剛膽と、沈勇と機敏とは、到底大人も及ぶものではない、給仕の龜鑑として表彰するのみならず、再生の恩人として終生お前の恩は忘れないぞ、應急手當をして貰つたら、直に入院させるから、全快するまで十分に療養するが宜い。」

と衷心から感謝して慰めた。優は青褪めた顔に、滿足の微笑を見せて、

「閣下のお軀に、お怪我がなくて何より結構でした、惡者捕つたさうですが、どうか酷い目に遭はして遣つて下さい。」

「兇漢は、直に取押へて縛してあるから、十分な取調べをして、敵を取つて遣るから安心するが宜い。」

刺客

高木優が負傷は、間もなく最寄の醫士が來て、應急手當を施した後、直に赤十字社病院へ入院さした。醫士の診斷に依れば四週間の療養を要するとのことである。

扨又刺客は取押へられた後は、誰が何と問ねても、堅く口を噤んで、一言隻句も答へなかつたが、やがて麹町警察署の署長が來る、續いて判事、檢事が出張する、數人の高等刑事が來る、容易ならない犯罪として取調は開始された。

「其方の姓名は何といふか。」

先づ豫審判事が森嚴な態度で問ひかけた。

「憂國の志士大東進吾である。」

これまで口を噤んだ刺客は、傲然と答へた。

「原籍地は何れだ。」

「山口縣長門國萩町の士族である。」

「現住地は何れだ。」

「住所不定だ。」
「目下何れに宿泊してをるか。」
「所々の空家を宿泊所としてをる。」
「年齢は幾歳に成るか。」
「當年二十八歳。」
「憂國の志士を以つて任じてをる者が、何故に菊池琴也なぞと僞つたのだ。」
「我輩の本名で面會を求めても、面會致ないと考へたから、菊池の名刺を利用したまでのことだ。」
「菊池の名刺を如何して所持してゐるか。」
「活字を買求めて自分で印刷した。」
「菊池琴也を知つてをるか。」
「未見の人だ。」

「菊池の名で面會を求めれば、何故に面會が遂げられると考へたか。」
「大藏省とは關稅問題に就いて重大な關係があるから、必ず面會することゝ考へた結果、職員錄中から菊池の名を撰り出したまでのことだ。」
「抑も這回かゝる兇行を演ずるに至つたのは、如何なる怨があつてのことか、其顚末を申し立てよ。」
「外務大臣伊藤嘉德を斃さんといふ決心をしたのは、私怨が在つてのことではない今や將に改正されつゝ在る各國との條約は、國威國權を損傷する甚しきもので、對等條約でないことを探知したから、これが締結を中止させんが爲に、愛國の有志が極力勸告したに拘らず、飽まで締結を敢行せんとしてをるから、天に代つて誅戮するの止を得ざるに至つたのである。」
「しからば、伊藤嘉德を謀殺する決意をもつて面會を求めたんだな。」
「然り。」

「他に同志の者は無いか。」

「無い。」

「兇行に用ひた短刀は何れで求めたか。」

「三年以前に、日本橋の金物商店で求めたが、何といふ商店であつたか、記憶してゐない。」

「伊藤嘉德を殺害すれば、條約改正は中止するものだと心得てゐたか。」

「無論中止するものと確信してゐたが、若し中止致ないとしても、十分なる効果はあるものと思つてゐた。」

「其方はこれまで、何れかの政黨に關係は無かつたか。」

「政黨に籍は有してゐないが、主義は自由主義を採つてをる。」

「目的を達した曉は如何する決心でゐた。」

「其場を去らず、自殺する覺悟であつた。」

「何故に逃走を企てた。」

「外相を斃すまでは、國家の爲に自分の存在を必要と考へたからだ。」

「しかるに、目的の外務大臣へは、微傷だに負はせずして、却つて僅か十三歳の高木優といふ、給仕に重傷を與へたのは、天下の志士に有るまじきことではないか。」

「固よりかゝる少年を傷ける精神は、少しもなかつたのであるが、既に外相を刺さんとした刹那、少年に組附かれた爲に、遺憾にも目的を遂げ損じたのみならず、當の外相が逃げ去つて了つたから、後を逐ひかけやうとしたけれども、少年が全力を罩めて脚に組附いてをるので、逐ひかける事が出來なかつたから、猪を逐ふの獵師山を見ずで、目的を達する爲には、手段を擇ぶ自由を許さなかつたから、脚を放させやうがために、止を得ず斬り附けたのだ。」

「更めて問ねるが、其方は何を職業としてをるか。」

「無職だ。」

「無職業の者が、どうして生活してをるか。」
「友人や知己の所へ往つて、金子を借りて生活費に宛てゝゐたのだ。」
「其友人知己の姓名を、一々申立てい。」
「それはいはない、若し申立てた日には、這回の事件に關係でもあると想像して、嫌疑の累を及ぼしては、これまでの厚意に對して濟まない。」
「しかし、それを申立てなければ、警察力をもつて、飽くまで搜査致なきやならないが、それでは双方の不利益になるから、手數をかけさせずに、速かに申し立てゝはどうぢや。」
「搜査が出來るなら御勝手に願ひませう、我輩の口からは斷じていはない。」
「して見ると、常に金錢を惠まれてをる人々は、這回の兇行に就いて、何か間接或ひは直接に關係があると見えるな。」
「斷じて關係はない。」

「關係が無ければ、陳述しても差支へ無いぢやないか。」
「平素厄介かけてをる上に、かういふ犯罪事件で迷惑を掛けるのは、我輩の良心が許さない。」
「飽くまで陳述致なければ、警察力に依つて搜査させるまでの事だ、裁判上必要と認めた上は、何處までも搜査させなければならないから……」
「それは隨意にするが宜い。」
「其方は他に同志者が無いといふけれども、本職の見るところでは、他に必ず同志が在ると思ふが、どうぢや。」
「大東進吾は、自分の信ずる所は、如何なる難事も斷行するの決心を持つてゐるから、這回の實行に就いても、同志を求むるが如き必要を感じない、故に單獨で實行に着手したのだが、國賊伊藤嘉德を逸したのは、千載の恨事である。我輩不幸にして、目的を達し得なかつたけれども、若し飽くまで屈辱的條約を締結するに於ては

百の大東、千の大東が、必ず顯れて天に代つて誅伐する事を斷言する。」

滔々と氣焰を吐いた。

豫審判事は、これにて假豫審の取調を了へて、刺客は一先警察官の手に委した。かくて又判事、檢事は、伊藤外相に面會して、兇行當時の模樣を聽取つて歸つて往つた。

伊藤外相が刺客の爲に襲はれた報が、一度省外に洩れるが否や、各新聞はいひ合はしたやうに號外を發行して、この大變事を報告する、平素交際ある朝野の名士は、馬車、自働車を驅つて、引切り無しに見舞に來る。外務省内の混雜は名狀すべからざるものであつた。これがために萬一を警戒する爲に、此日から各大臣に護衛者を附ける事になつて、世の中が何となく不穩の感を起した。

大東進吾は、麹町警察署長の取調を受けた後、謀殺未遂犯として檢事局へ送られて、直に巣鴨監獄内の未決檻へ囚禁と身と成つた。

この報が新聞號外に依つて、世に知れると、其夜の中に、彼の小栗五狼は、所在を晦まして了つた。

病院室

高木優が入院した病室は、赤十字社病院の階上の一等室であつた。かく不相應な病室に入ることを得たのは、伊藤外相の厚意であるのだ。伊藤外相の外交上の動功に依つて、一平民の身から華族に列せられて、子爵を授けられた程の人であるから、頭腦の如きも極めて冷靜な、理性の勝つた方で、喜怒哀樂を容易に色に見せない性質であるが、此度の刺客事件に對する、優の犧牲的行動には、非常に心を動かされて、其沈勇と剛膽を激賞すると共に、衷心から感謝の意を表してゐた。であるから優が入院すると、間もなく自働車を病院へ飛ばして、自ら其病床を訪れた。

「どうぢや、手術を受けたさうぢやが傷が痛むか。」

優は青褪めた顔に微笑を泛べて、

「つく〳〵と、少しは傷みますが、そんなに太くはありません。」

「四週間位で全快するといふことだが、いつまで要つても宜いから、十分に治療して貰つて、すつかり治つて退院するが宜い、これから院長に會つて、能つく賴んで置いて遣るからね。」

「傷が化膿さへしなければ、三週間位で退院されるさうです、私斬られても殺されても構はないから、どうか閣下がお逃げになるだけの邪魔して遣らうと、珈琲茶碗を投げ附けて見ましたが、追附かないものですから、脚に抱附いて遣りましたら、到頭怒つて斬附けましたが、この位な傷で閣下にお負傷が無くて濟みましたから、眞個幸福だと思ひます。」

「お前が邪魔をして呉れなければ、私の生命はどうなつたか知れないよ、あの刄物で急所でも抉られやうものなら、到底救かるものぢやないからね。」

「なか〳〵能く切れる短刀でした、私冷りとしたばかりでしたから、斬られたとは思はなかつたのですが、深さ一寸で長さ三寸五分から切れてゐたんですから、あの短刀で抉られでもしたら、隨分太く斬れやうと思ひます、眞個危いことでしたね、豈夫あゝいふ惡い奴だとは思はなかつたですが、迂濶してをると、甚麼目に遭ふか知れないですから、これからは、成丈けお會ひにならないが宜しいと思ひます、あれ等の仲間が又來ないとは限りませんからね。」

と大人びたことをいふ。

「これからは注意して、成たけ會はないことに致やう、危險だからな。」

「私、佐分さんから、閣下の爲には生命を棄てる決心で勤めなければならないと、度々いひ聞かせられたものですから、萬一の時には生命を棄てる心でゐましたが、これで佐分さんにも申譯が立ました。」

伊藤外相は、佐分の周到な注意を深く感動せずにはゐられなかつた。

「然うか、佐分君が那樣ことをいつたのか……」

「はい、大臣附の給仕にして頂いたんだから、豈夫の節には、火の中水の中にでも飛び込む決心で、忠勤を勵まなければならないと仰やいました。」

「それでは、又見舞つて遣るが、醫士のいはれることや、看護の人の辭を能く守つて、大切に療養しなければならないよ。」

「どうも有難うございました。」

「お金子を少し許り置て遣るから、欲い品があつた時、買つて貰ふが宜い。」

と十圓紙幣一枚を與へた。

「お金子は佐分さんから頂いたのがありますから、宜しうございます。」

「それでは納つて置て、又必要な時使用するが宜い。」

「それでは頂戴致します。」

と戴いて納めた。外相は院長に面會して、治療上のことを、特に依賴して歸つて往

つた。

優が幼稚な頭腦には、大臣といふ官職が、神樣でゝも在るかのやうに、崇拜されてゐた。其崇拜してゐた大臣の傍近く仕へるのを、得難い誇として欣んでゐた彼は犧牲的活動をしたとはいへ、それが爲に負傷したとはいへ、大臣自らが給仕風情を慰問したといふことを、感泣して欣ばずにはゐられなかつた、外相の歸り去つた後彼は寢臺の上に靜に横はつて、種々なことを考へるのであつた。

「僕は此世の中に、僕ほど不幸な者は無いと思つて、阿母さんが死んだ時は、寧そ電車にでも轢かれて死んで了はうか知らと思つた程なのに、今日に成つて見ると、僕ほど愉快な、幸福な者は少いであらう、外務大臣附の給仕に成つて、月給十圓戴くさへ、友達は勿論、知つてるだけの人は、皆な仕合者だ仕合者だと羨ましがつてをるほどだのに、いくら閣下をお救けしたとはいへ、かういふ立派な病院の一等室へ入院して、博士の院長さんや、醫學士の方々に手術を受けたり、診察して戴いて

看護婦を附切に附けて戴くなんて、阿母さんの病氣の時に比べると、天と地ほどの違ひがある、其上に大務大臣ともいはれる方が、態々此所まで御見舞に來て下すつて、十圓といふ澤山なお金子を下すつたんだもの、這麼仕合せなことつてあるもんぢやない、どうか早く傷が治つたら、これまでよりも一層氣を附けて勤めたいものだが、四週間といへば、ちよつと一ケ月だからね……其間に誰か外から代りの給仕が入らねば宜いが……ひよつとしたら入るかも知れない、大臣附の給仕は一人よりゐないものだからね……佐分さんへ代りが來ても僕が退院したら、元通り使つて戴くやうに賴んで置くことに致やう……それはさうと、僕の宿で心配してはゐないか知ら……葉書でも出して置かうか知ら……いや〳〵あれだけの大騷をしたのだから、もう屹度聞いて知つてるだらう、外務省へは近くもあるし、外のことゝ違つて、大臣を殺しに來た惡漢が捕つたのだからね……」

這麼ことを考へて、神經を興奮さしてゐるところへ、看護婦が入つて來て、

「高木さん、貴方のことを書いた號外が出ましてよ。」

一葉の新聞號外を手にしてかういつた。

「さうですか、何と書いて在りますか、讀んで聞かして頂戴な。」

「讀みますから能くお聞きなさいよ。」

看護婦は號外を擴げて讀み始めた。優は熱心に耳を欹てた。

「本日午後一時二十分頃大藏省參事官菊池琴也なる名刺を出して、外務省に外相を訪問した紳士風の男が在つた、伊藤外相は、目下條約改正中とて關稅問題の打合せにでも來たのであらうと、直に第一應接室へ通させて置て、やがて面會すべく應接室へ入つた。其時入口を後にして椅子に倚つてゐた面會者は、外相が相對した椅子に着くべく傍を通らんとした刹那、隱し持つたる短刀を揮ひ、一突に刺殺さんとした、注意深い外相は、幸ひに身を飜すが否や、有合ふ椅子を手にして襲擊を防いで、寸時挑み合ふてゐたところへ、紅茶を運んで來た、外相附給仕高木優(一三)が、

かくと見るが否や機敏にも紅茶々碗を、刺客に抛附け、挫むところへ、剛膽にも刺客の脚に組附いて、外相に血路を與へて室外へ去らしめた。爲に外相は微傷だも受けず、危難を逃れたが、刺客は憤怒の餘り、高木給仕へ一刀を浴せ、逃亡せんとしたが、遂に其場に於て、省内多數の爲に取押へられた。高木給仕の負傷は四週間の治療を要する重傷であるが生命には別條ない、刺客は目下假豫審中であるが、原因は條約改正に反對の結果である。」

新聞の號外を讀了つた看護婦は、今更のやう優の機智と勇膽とに感激して、

「まあ、この號外で見ると、眞個外務大臣は貴方の働きで、少しの御負傷もなさらないで、危難が救かつたんですね。」

優は我が働きが號外に出たのを、心の中に滿足しつゝ、

「眞個その號外の通りだつたんです、僕が闥を開けて入つた時は、惡漢はピカ〳〵光る短刀を振上げて、閣下を斬り附けやうとしてをる、閣下は椅子を手に持つて防いでゐらしつた時でしたから、何事が起つたのかと吃驚したけれども、閣下が早く皆なを呼べと仰やつたものですから、直に室外へ出やうかと思ひましたけれど、しかし其間に閣下の身に萬一の事が在つてはならないと考へたものですから、僕の體を閣下の爲に斬られる決心で、熱い紅茶を打浴けて置いて、力の有たけ出して脚に抱附いて遣つたんです、それが爲に自由に進むことが出來なかつたものだから、閣下は其隙に逃げ出して了はれたんです。」

「感心だわね、怖かつたでせうに、能くそんな決心が出ましたね。」

「だつて、僕は一人限で、親も無ければ兄弟もないんですから、斬られたつて怖されたつて、誰も困る人はないんですが、閣下は天皇陛下の御大切な大臣である上、に條約改正といふ大切な仕事を致かけてゐらつしやるんですから、何でも彼でも御救けしなきやならないと思つたから、怖いことも恐ろしいことも夢中でした。」

「ですけれども、能くこれだけの負傷で助かりましたね。」

「何有、遲々してると、自分の生命が危くなつたものだから、脚を放させる意で斬り附けたんですから、これだけの傷で助かつたんです、僕はそれでも閣下が危ふければ、まだ放すのぢやなかつたですが、もう閣下が室外へ出てお了ひなすつたものですから、放して遣つたら、直に室外へ飛び出しましたが、到頭取捉まつて了つたんです。」

「一命に關る負傷なすつても致方がないのに、これだけの負傷で、大臣の危難を救ひなすつたのは、矢張神樣の御救ひですわ、この負傷が全快して退院なさると、大臣樣から、澤山な御禮を頂戴なすつてよ。」

「僕新聞賣つてたのを、大臣附の給仕に取立てゝ戴いたんですから、御禮なんか戴かなくつても、退院してからも使つてさへ戴けば、それが何より嬉しいんです。」

かゝる話の折柄へ、いひ合はしたやうに、通信社や新聞社の外交記者が、續々と見舞といふ口實の下に、面會を求めに來た旨を、小使が告げて來た。

「僕そんな人に會ふのは厭ですから、若し僕のことが聞きたかつたら、外務省に往つて、佐分書記官から聞いて貰つて下さい。」

と謝絶した。

「まだ入院して手術を受けなすつたばかりですから、發熱してゐるから、御面會は經過を見た上でなくちや許されないと、然う仰しやつて下さい。」

と看護婦もいひ添へた。小使は承知の旨を答へて立去つた。

「如何です、傷が痛みは致ないですか。」

「えゝ、つッく〳〵と少しは痛みますが、辛抱のならない程ではありません。」

「少しお寢つて御覽なさい、神經が餘程興奮してるやうですから、起てゐらつしやると、却つてお惡いかも知れないわ。」

いふ辭の了るか了らないところへ、靜に闥を開けて入つて來た人がある。看護婦は見るより、

「誰方様でゐらつしやいます？」
と誰何した。
訪問者の答へない中に、優は欣々と、
「佐分さんでしたか、どうも種々有難うございました。」
と挨拶した。訪問者は佐分誠也でフロックを着て、右手に高帽を持つてゐた。佐分と知つた看護婦は、直に椅子を持つて來て進めた。
「私は外務省の者ですが、高木が入院して種々御世話をかけますが、どうか何分にも宜しく願ひます。」
と看護婦へ挨拶した。
「左様でゐらつしやいますか、とんだ御負傷なさいまして、御心配でゐらつしやいませう……」
と挨拶を返した。

「どうぢや、傷が痛みはせんか。」
と優に問ひ試みた。
「少しは痛みますけれど、我慢のならない事はないです。」
「一ヶ月も經てば癒るさうだから、大切に養生するんだよ。」
「僕負傷は心配致ないですが、一ヶ月も缺勤すると、代りの給仕をお入れになりは致ないかと、そればかり心配してゐますから、どうか貴方から、僕が退院するまで外の人をお使ひにならないやうに、閣下へ御願ひなすつて置いて下さいませんか……」
佐分は微笑しつゝ、
「それは心配致なくとも大丈夫だ、お前が全快して退院するまでは、他の給仕を代りに使つて、外から採用は致ないから安心してゐるが宜い。」
「どうか宜しく御願ひ致ます、それから先刻閣下が御見舞に來て下さいまして、澤

山にお金子を戴きましたから、相濟みませんけれど、貴方から御禮仰やつて下さいませんか。」

「さうか、閣下が御入來に成つて御見舞を頂戴したのか、私から能く御禮をいつて置て遣るよ、しかし高木、お前は献身的に働いた代りには、あの尊大な大臣閣下が故々御見舞に來て下すつたゝけでも非常な名譽として滿足致なきやならないよ、畢竟お前が生命を的に閣下の危難をお救けしたものだから、給仕風情の身分でありながら御見舞に御入來になつたのだ、閣下はなか〳〵自尊家で、御親戚方へでも、御見舞なぞに、自分で御越に成る事は稀で、皆な代理で御濟しになる程だから、お前を故々訪問されたのは、眞個破天荒といつて宜い位なものだ、其上退院の曉は、給仕の龜鑑として表彰するといつてゐられたから、這麼名譽な事があるものぢやない。」

「さうですかどうも有難うございます、それから僕の宿でどうして歸らないかと心

配するであらうと思ひますから、相濟みませんが、些と小使さんでて遣つも戴けないでございませうか。」

「先刻新聞の號外を見たといつて、心配して外務省へ遣つて來たから、私が詳しく樣子を話して置たから心配するに及ばない。」

「それはどうも有難うございました、新聞社といふ者は早いものですね、唯今號外を見ましたら、もう惡漢の捕つた事から、僕の事まで出てゐましたから、驚いて了ひました。」

「各新聞でいひ合したやうに號外を出したが、どの號外にもお前の働きを、二號活字で載せてあるから高木優の名は、全國に傳はつて知らない人はない程であらう。」

「新聞社といへば、先刻四五人の新聞記者が僕に會ひたいといつて來られたさうですが、會ふのが厭でしたから、僕の事が聞きたければ外務省へ往つて、佐分書記官から聞いて下さいと挨拶して歸つて貰ひましたから、貴方へ面會しに來るかも知れ